

---

from YOU.for YOU.

西宮 東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

f r o m   Y O U . f o r   Y O U .

### 【Nコード】

N 4 7 6 1 A

### 【作者名】

西宮 東

### 【あらすじ】

幸紀と飛鳥。二人は生まれたときからずっと仲のいい兄妹。そう思っていたのは幸紀だけ。いつからか飛鳥は幸紀に恋心を抱き、二人の関係は次第に崩れ初めた。そう、ガラスが割れるように、互いを思うが故にいとまたやすく。兄と妹、両側の視点で繰り広げられる恋の話。

## 001・side-B（前書き）

side-Bは兄視点です。

## 001・side・B

―イントロダクション―

俺は妹に恋をした。  
それだけ。たったそれだけの話。  
俺がそうなるまでの小さな話。

―プロローグ（B）―

妹にメンコを教えた。  
妹にコマを教えた。  
妹に剣玉を教えた。  
妹にゲームを教えた。  
妹にサッカーを教えた。  
妹に勉強を教えた。  
妹に何でも教えた。  
母さんが俺に教えてくれた、先に生まれた者として、優しい兄としての最低条件。

妹にメンコで勝った。  
妹にコマで勝った。  
妹に剣玉で勝った。  
妹にゲームで勝った。  
妹にサッカーで勝った。  
妹に勉強で勝った。  
妹に何でも勝った。  
父さんが俺に教えてくれた、先に生まれた者として、威厳ある兄としての最低条件。

妹にメンコで時々負けてやった。  
妹にコマで時々負けてやった。  
妹に剣玉で時々負けてやった。  
妹にゲームで時々負けてやった。  
妹にサッカーで時々負けてやった。  
妹に勉強で時々負けてやった。  
妹に何でも時々負けてやった。  
誰も教えてくれなかった、先に生まれた者として、兄として妹を笑わせる最低条件。

自分で見つけた、俺だけに見せてくれる妹としての笑顔。それは例えようがないほどかわいかった。  
だが、所詮幼い子供の頃の兄妹愛。今では普通の仲のよい兄弟だ。

## 001・side・S（前書き）

side・Sは妹視点です。

―イントロダクション―

私は兄が好きだった。

生まれたときからずっと。

一生に一度の大きな話。

・プロローグ（S）・

私には兄さんがいる。強くて、格好よくて、勉強が得意で、スポーツもできる万能な兄さんが。それに性格も優しい、文句の付け所がないほど良い兄さん。

生まれたときからそばにいて、今もずっとそばにいてくれている。お父さんとお母さんが転勤する時も私は行きたくない、といったら兄さんだけは傍に残ってくれた。兄さんも行きなくなかっただけのもかもしれないけど、私は兄さんが隣にいてくれるならそれでいいと思っている。

兄さんはしっかりしてるし、お父さんとお母さんもすごく信頼していたから渋々ながらも許してくれた。だから今は兄さんと私、広い家に二人きり。何だかとっても嬉しかった。

兄さんは私の中で一番。友達には兄偏愛者<sup>ブラコン</sup>って言われたり、からかわれたりするけど、それでも兄さんの優先順位は一番。もう、変えられない。もう、変わらない。

だから、兄さん。

兄さんの優先順位の一番は私にしてね。いいでしょ？

お願い、兄さん。

兄さんの大切なものは私だけにしてね。いいでしょ？

だから、お願い。

お願いだから、兄さん。

私の傍にずっといてね、兄さん。

私だけのものでいてね、兄さん。

他には何も望まないから……。望まないから……。

―イントロダクション―

例えば誰かのために生きる事が出来たなら、ずっと今以上、幸せになれる。

- 101・七月一日 (side・B) -

俺、睦月 幸紀は寝ていた。人間なのだから当然寝るときは寝るんだ。それ以上の理由は必要ないだろう。

時間的には学校に行くには問題ない。むしろかなり余裕があるくらいだ。だが、余裕をもつことを習慣付ける意味として、この時間に起きている。学校で食べる弁当も作らなければならないし。

本当ならば自分のだけ作ればいいのだが、兄としては妹の分も作らなければならない。妹本人は自分で作ると言い張るが、朝が苦手な上、言っちゃ悪いが料理が下手だ。自分の身を守るためにも自分で作らなければならない。まあ、ダイブもつとも大きな理由としては、兄として妹の面倒はきつちりと見る、というものが大きい。それは両親との約束でもあるし、自発的なものでもある。

マザコンな訳ではないが、俺自身、本当は母さんが作った弁当が食べたい。

でもこれは自分で望んだこと。両親は現在転勤中。この生まれ育った土地に残るため、妹とこの家に二人で住まなければならなかった。これぐらいのことは我慢しなければならぬ。

ベッドから這い出て制服に着替える。

俺が通っているのは国内でも有数の進学重点校、私立葉崎高校。数年前までは上の下ぐらいの高校であったが、二年前ある学部を作

ったことにより日本の五指に入る有名校になった。

魔術学部。

それが作られた学部の名。

その実験的一期生にあたる高校二年生に俺は在籍していた。クラスメイトはたった十人。大して受験者数は100人を軽く超えていた。それほどに門が狭く、試験は難しい中、合格したことは何よりも誇りに思っている。それが理由で親と離れてまでここで生活しているのだ。

地味な紺色のブレザーに袖を通し、昨日のうちに準備しておいた授業道具と部活道具を持って部屋から出た。俺の部屋は二階にある。少し急勾配気味な階段を降り、リビングに入る。入り口を潜ってすぐの邪魔にならないスペースに荷物を置く。

伽藍とした部屋の端にある台所で適当におかずを作り、自分用の少し大きな二段の弁当箱と妹用の小さな弁当箱に詰めた。弁当包みでくるみ、リビングにある机の上に妹の分を置く。自分の分は上下を気にしつつ鞆の中にしまった。

もう一度、台所に入って行き、食パンをトースターにセットして、俺は二階に上がる。もちろん妹を起こす為に、だ。

階段を規則的な音を立て、上がっていく。時刻は六時五十分前後。起きるには早い時間だが、俺の妹は放置しておくで平気で遅刻する。兄としては見過ごせない。もっと後に起こしてやればいいのだが、生憎俺は朝練があるのだ。

扉の前に立つと軽くノック。いくら気心知れた妹とはいえ、いきなり部屋に入るようなことはしない。それは最低の礼儀。まあ、ノック程度で起きるようなら遅刻はしないから、結局無断で入るしかないんだけど。

「おい、飛鳥あー」

妹の名前は飛鳥という。名前の由来は知らない。少なくとも飛鳥時代の飛鳥から取っていないことを願っておこう。

名前を呼んでも無反応。俺は軽いため息をつき、ドアノブに手を

かけた。

「飛鳥、入るぞ」

ノブを回し、押す。何の抵抗も無くドアは開く。女の子らしく整然とした部屋はそこにはない。漫画や衣服が床に散乱し、かなり散らかっている印象をどうしても受ける。これは帰ってから片付けさせる必要があるだろうか？いや、そこまで干渉するのはいくらなんでも兄にしては過保護か。もう中学三年生なのだ。それぐらいは自分のペースでやりたいはずだ。俺は男だから女の子である妹の気持ちとは分らないけど。

「この前片付けたはずなんだけどな……」

しかしながら、そんな愚痴は自然と漏れてしまうもの。俺は衣服と衣服、漫画と漫画の間を縫うように飛鳥の寝ているベッドに近づいた。かわいい寝顔で寝息を立てている飛鳥。起こすのは忍びない気がしたが、起こしてやらないのもまた問題があるので飛鳥に手を伸ばす。

「おい、起きろ、飛鳥」

「んあ？」

飛鳥の肩を揺るとなんととも言えない声が口から漏れた。完全に寝ぼけているようだ。

俺はめげずにもう一度、口を開いた。

「おい、早く起きろ」

やはり飛鳥は無反応。まったく、困ったものだ。

こういう時は無理矢理起こしてやるのが効く。

と言うわけで、まず布団をはぐ。中学三年生の女子とはいえ、妹。パジャマの着乱れた姿を見たからとはいえ、変な気持ちにはなったりはしないが、見られる側は嫌だろうと思うので微妙に罪恶感。

次に背中の方と膝の裏に手を回し、そのままに持ち上げる。

俗に言うお姫様抱っこという奴。軽いので難なく成功。

最後に背中を持って俺に寄りかかるように立たせる。立ったまま寝させるという、拷問にも近い人間の限界に挑戦した結果、出来て

しまった。なかなか見れるものではない。可哀想ではあるが。

「うう、うううー……」

いきなり飛鳥はうめき始めた。そして悪夢でも見ているかのように苦しげに。

でも心配は無用。これが飛鳥の起きる予兆だ。こんな姿、赤の他人にでも見せたら大変な事になりそうだ。

数秒の後、

「くわー」

と可愛い大きなあくびをした。可愛いが見つとも無い。条件反射なのか、眠りから冷めた飛鳥はいつも眠そうに目をこする。目をこすると目が痛みそうなのでやめさせた方が良さそうだろうか？

そんな事はさておいて、どうやら俺は気付いていないらしい。おそらく自分の置かれている状況すら理解していないだろう。

「おはよう」

飛鳥を現実回歸させる為、俺から声をかけた。すると飛鳥は驚いたように飛び退いた。効果覲面とはこのことか。

「な、ななな、何で、に、にに、兄さんが!？」

いや、そんな思い切り驚いて指差さなくても。しかもどもりすぎ。どうやらまだ寝ぼけているらしい。頭をたたけば起きるだろうか。さすがにそれは可哀想か。

「いつもながら、それは飛鳥が起きないからだ」

あきれたように俺は言った。事実なんだからそれ以外に仕方ない。それに数週間前までは母さんが起こしてたんだ。習慣付かないのも無理はないか。

落ち着いている俺とは正逆に、更に更に慌てる飛鳥。

「きゃあ！髪ボサボサッ!!」

そんなことを1人で言っている飛鳥を無視し、部屋を出て行く。いつまでも付き合っていたらこっちが遅刻しそうだ。完全に出て行く直前、思い出したように俺は一言。

「先に行っているから遅刻すんなよ」

「あ、うん」

素直な返事。それだけやり取りして一階に降りた。

もう七時になっている。際どくやばい。急いで二人分のトーストにバターを塗り、自分の分は口にくわえ、飛鳥の分は皿において苳ジャムを塗った。

飛鳥の弁当箱の横に皿を置き、メモ用紙を一枚出して近くに置いておく。そして俺は机においてあるペンでサラサラっと文字を連ねた。トーストを食べ終わると手を払い、急いで鞆を持って玄関に行き、靴を履いて走って家を出る。

「いつてきます」

返ってくる言葉はないが、いつもの癖でいつてしまった。返答が無くてもこの挨拶を止める事はないだろう。悪いことはないし。

俺も飛鳥に言えないくらい母さんたちがいたころの習慣が抜けきっていない。兄として示しがつかないとそんな考えが浮かんできたその時だった。

「いつてらっしゃい！」

予想に反して返事は返ってきた。飛鳥のようだ。何気ないこんなことが無性に暖かい気がしてならない。だから俺は帰ってくるかも分からない挨拶をずっと続けてしまうのだろう。

そのまま俺は上機嫌に学校へと駆け出していた。

## 101・side・S

### ・イントロダクション・

もしも生まれ変わっても、私は私に生まれたい。貴方の傍に生まれたい。

- 101・七月一日(side・S) -

私、睦月 飛鳥は寝ていた。ふかふかの布団の中でそれはもうぐっすりと。

本来なら学校に行かなければいけない時間。でも布団の中はとっても気持ちいい。だからいつも遅刻しそうになる。でも、私はいつも遅刻しない。

それは大好きな兄さんがいるから。部活があって毎日忙しいのに部屋までやってきてわざわざ起こしてくれる。

だから悪い言い方をすると依存してしまう。

それに朝、兄さんが起こしてくれたら兄さんに一番に会える。もしたらすごく気分がいい。寝起きは悪い所為で、だらしない格好を見られるのは難点だけ。

と言うわけで私が朝に弱いのは兄さんの所為でもある。

だからって兄さんを攻めたりしないし、辞められたら困る。私の朝の楽しみなんだから。攻める理由だって明らかにあてつけとか、八つ当たりだし……。

そろそろ兄さんが上がってくる頃。それが理由な訳じゃないけど、だんだん眠くなってきた。

いつもそう。兄さんが上がってくる直前までは臆気ながらも記憶があるのに、兄さんが上がってきたときの記憶はいつも無い。どう

してだろう？

答えは簡単。兄さんが近くにいてくれるだけで私は安心出来る。兄さんが横にいるときに一番ぐっすり眠れるの。

「――、あーか――」

遙か遠くの方で兄さんの声が聞こえる。

頭までは届いてるはずなのに身体は動いてくれない。動く気も無いんだけど。

「お――きろ――か」

今度はずっと近くの方で声が聞こえる。どうやら枕元まで来てくれているらしい。

だから私は少しだけ言う事を聞く口を開いた。

「んー？」

「お、早――きろ」

動いたのは口だけで他に何の反応も示してはくれなかった体。

もしかしたらこれは夢？私の勝手に抱いた幻想？きっとそうだ。あまりの眠たさでみる幻覚。現に不思議な浮遊感がある。宙に浮いて、それでいて暖かいものに包まれている安心感。きっと兄さんがまだ来ていていないんだ。だったらまだ寝ていよう。

時として不快感とは自分の思っているとは別の方向からやってくるものらしい。そう、今の私みたいに。

突然、足元にしつかりとあった浮遊感が無くなった。足の方だけなくなれば当然、立ったような状態になる。今の所、寝ながら立っているなんて技能を私は持って無い。

「う、うー」

苦しかったので自ずと口からうめき声が漏れてしまった。

それにしても不思議。体が寝ていて足に力が入らないはずなのに、ずっと立っていられる。上半身の温かい浮遊感のおかげらしい。その所為でばつちり目が覚めた。あまりスマートな起き方じゃないけど。目覚めは最悪、当然機嫌も悪い。

でもとりあえず起きた時の日課だけは果たしておこう。

「くわー」

私は大きなあくびをした。これをしないとどうも起きた実感がしない。兄さんの前ではなるべくしないけど。

寝ぼけ眼の所為で視界がぼやけているので目をこすった。そうするといつも通りのクリアな視界が広がった。ちなみに私の視力は両方2.0。ちよつと自慢。

ところで簡単な疑問なんだけど、何で立っているんだろう？はて私は夢遊病に悩まされている覚えは記憶の欠片も無いはずなんだけど……。もしや今日から発病したのかも。あり得る。自分で言いたくは無いけど私ならあり得る。事故と病気はいつも突然にやってくるものだ。うわー、どうしよう。そうだ、兄さんに相談すれば一発で解決してくれるよね。

「おはよう」

そうそうこんな感じの声のかっこいい兄さんに相談すれば……。つて、ええ！？

私は無意識の内に飛び退いた。我ながら最悪のリアクション。

「ななな、何で兄さんが?!」

反射的に指まで指してしまった。なんて愚かな行動をしてしまったんだろ。悔やんでも悔やみきれない。

早く頭を覚まさなければ、さらに泥沼化してしまう可能性は特大。いつもながら、飛鳥が起きないからだ」

呆れた様に兄さんはいった。その中にも優しさが込められているのを、私はひしひしと感じた。私って愛されてる♪

と、取り乱しちゃった。そんな私とは反対に、兄さんはどんな時も落ち着いている。私は慌てっぱなし……。どうしてもっと兄さんみたいにスマートに出来ないんだろ、私は。

必死に落ち着こうと辺りを見回している時、ふと鏡が目に入った。「きゃあ！髪ボサボサッ！部屋もグチャグチャッ！」

とんでもない姿を兄さんに見られちゃった。この前兄さんが一緒になって片付けてくれたこの部屋も。さぞ、兄さんは絶望したに違

いない。終わりだ……。もう立ち直れそうにないかも。

「先に行ってるから遅刻すんなよ」

「あ、うん」

それでも兄さんはいつも通り、私を起こして一回へ降りていった。だから私も平静を装い返事をする。よかった。特に気にしてないらしい。私の兄さんへの愛の前ではこんなことはちっけな出来事だった。愛は勝つ！

愛で思い出したけど昨日、愛妹弁当を作るって約束したのに結局寝過ごしてしまった。

そんな事は置いといて、早く準備しないと兄さんがつせつかく起こしてくれたのが無駄になってしまう。私は急いで着替え、髪を梳く。セミロングの髪をポニーでいるにまとめている最中、

「いつてきます」

と兄さんの声が聞こえた。

玄関まででて見送ってたけど、流石にそれは無理そう。だからほんの少し大きめの声で、兄さんに言葉を贈った。

「いつてらっしゃい！」

扉が閉まる音がしたから兄さんはもう家を出たようだ。私も早く家をでない。

髪を結い終わり、私は鞆を持って一階に降りた。鞆の中身も確認して忘れ物がないかも確認したから大丈夫。

一階に降りると朝食がすでに準備されていた。さすが兄さん。トーストにジャムまでちゃんと塗ってくれている。時間は余裕があるからゆっくり食べれそう。

さて食べようとする前に、横においてある紙に目が留まった。兄さんの走り書きのメモらしい。

- ・弁当を鞆に入れ忘れないこと。
- ・玄関の鍵を閉め忘れないこと。
- ・鞆の中身を確認すること。

・遅刻しない事。』

その他、諸々いろんな確認事項がかかっている。過保護すぎるまでに細かい。それは毎朝の事だから飛ばし飛ばし読み、最後の部分で目が止まった。

『P S ・今度は弁当楽しみにしてるぞ』

それは兄さんの書いた皮肉だったのかもしれない。でも、その言葉が私にとっては無性に嬉しくて仕方なかった。

私はそのメモ用紙を綺麗に四つ折りにすると、鞆の中にしまいこみ、意気揚々と朝食を食べるのだった。

- 102・七月一日(side・B) -

毎朝の事ながら朝練は疲れる。その上、今日は遅刻しそうだったんで学校まで走ってきた。疲労はもうピークに達している。これは一限目寝るのは確定かもしれない。

……いや、待て。一限目に寝るのはまずかった。確か魔術系統の授業が入ってたはずだ。

魔術の授業は他の授業と違って一回授業を抜かすと全て終わりになる。独学でついていけるような内容でもないし、そもそも《教科書》といわれるものが存在しない。本来、机上の論理である魔術だが、素人がやれば大惨事になりかねない。よって政府が参考書、その他諸々の魔術関連書籍の発行を禁止しているし、国際条約でも同様。

授業中にノートは取るが、授業終了時に即時回収され、厳重管理される。学校外ではおろか、決められた場所意外では魔術に関する会話・勉強ましてや使用などは厳禁。それほどに秘密主義な学問なのだ。

というわけで、一限目は眠さと世界一不可解な論理のダブルパンチ。もう死にそうな訳だが……。

まあ、兎にも角にも授業に遅刻にしたら話にならん。いっちょ気を引き締めていきますか。

靴箱内の上履きに手をかけて履き替える。そこで、深く抉るような三つ目のパンチがやってきた。でも、今回ののは前の二つのと違ってかなり物理的ではあるが。学校の内側、つまり中央階段側からものすごい勢いで肉薄してくる同じ学校、同じ学科の制服の人間。いや、人間とは思えないスピード。俺が見た最後の光景は、そいつの

胸についた校章だった……。って、こんなところで意識落としてたまるか！まったくこれじゃあ、安っぽいゲームのゲームオーバーみたいじゃないかっ！

「——っ！！」

頭を打ったんで無言でた打ち回る。本当は公然と痛いと呼びたい気分だったが、下手に声を上げて大事になったらそれこそ洒落にならない。授業に遅れるどころか、欠課なんてことになったら一巻の終わりだ。それだけは避けるべき。刹那的にこんな事を考えるなんて、自分はなんて保身にこだわっているのかと改めて認識させられた。

数秒後、痛みから復帰した俺はおもむろに体を起こした。鈍痛は残っているが、それもすぐに収まるだろう。

頭をおさえながら立ち上がり、制服についた埃を払って皺を伸ばす。ついでに乱れた髪も手で梳き、これで元通りだ。

「さて」

軽く掛け声を出し、そこら辺に落ちている鞆を拾って中央階段へと歩いていく。今日もいつも通り、良い朝だ。

「ちよっ、待つて待つて待つて！あまりのナチュラルな無視の所為でそのまま見送りそうだったわ！」

「……………」

今日もいつも通り、良い朝だ。本当にいつも通りの良い朝だ。三点リーダーかける四がとってもよく似合う清々しさ。

「もう、ごめんごめんごめん！謝るから無視だけは勘弁してえ……。泣きたくなちやうからあ……………」

「おはよう、綴木」

今にも本当に泣き出しそうな綴木の声を聞いて仕方無しに立ち止まり、振り返る。

綴木 妃奈——俺の少ないクラスメイトの内の一人。髪はショートで若干赤みのはいった黒、瞳も同色。小顔で全体的に小柄、プロポーションも引き締まっっていて、それなりに可愛い奴だ。

何でそんなのが朝っぱらからタツクルしてくるのかといえば、それには深い、アリュースシャン海溝ぐらい深い訳がある。……水面下7500mだっけ？そんな事はどうでも良い。

アレは去年の四月ごろだっただろうか。日々を平々凡々に、それなりに特異ではあったが一般常識の枠の中で厄介な事をのりくりかわしながら生活していたある日、俺の靴箱にとある手紙が入っていた。細かい事は省くが、内容を要約するとそれはラブレターという奴だったわけ。自慢ではないが、いや、自慢か。入学して間もないこの時期、高校内で既に俺はこの手の手紙をもらうのは初めてではなかった。だからそれなりに落ち着いて手紙に対応し、断った。その頃ちようど両親と共に引越すべきかどうかで、なんやらどたばたしており、そんな余裕が無いのが理由。その手紙の送り主が綴木 妃奈。綴木には引越すかどうかなんて重たい理由は明かさず、やんわり断った。綴木に対してそれなりに好意を持っていたし、おそらく家庭の問題さえなければ付き合っていたはずだ。だから余計傷つけないようにと、針の立たぬよう細心の注意を払って。

それが問題だった。綴木は俺が理由を明かさないので不思議に思い、徹底的に俺の身辺を調べたらしい。なんとも行動力のある奴だ。一歩間違えば陰湿な犯罪者だぞ。それで家の問題が露呈し、それならばと諦めたのかと思いきや、余計やる気になったというか、火がついた。付き合ってくれないならば俺の周りで『恋人らしい行動』を取り、既成事実にし始めたのだ。

そして現在に至り、先刻のように何かと絡んでくる。自分で言うのもなんだが、よほど俺にご執心らしい。

それは男としてはうれしいが、睦月 幸紀としては困っている。以上、回想終了。さて、閑話休題。

綴木はいつもこの時間帯なら教室で俺の机を占領しているころのはずだが、よりにもよって今日は玄関で出くわしてしまった。厄日。本当に今日は厄日だ。この疲れているときに厄介なのに遭遇したものだ。

綴木は右手を高々と上げ、たははと快活に笑いながらようやく挨拶を始めた。

「いや、おはよう幸紀くん！ホント、こんな朝から奇遇だね！今日は最高の一日になりそうだよっ！」

こっちは誰かさんの所為で最悪の一日になりそうだ。そんなことを口にすれば、余計面倒になるから、俺は無言で受け流す。そんな俺にはお構いなし、軽快に笑いながら綴木は畳み掛けるように言葉を連ねる。

「ねえ、『妃奈』って呼んでって毎日言ってるじゃん。私も恥ずかしいながら公衆の面前で『幸紀くん』って呼んでるのに不公平じゃない、それって？と言うわけで、参、弐、叁、ハイどうぞ！」

わざわざ大字表記で数を数えてやがる。まったく持って律儀というか、変な奴だ。そして朝からなんてハイテンションな奴だろうか掛け声と共に右手をマイクを持っているかのように俺に突き出されたところで、俺は答えようが無い。

俺はただでさえ近い距離に立っている綴木の元まで接近し、しっかりと視線をあわせ、淡い笑みを浮かべながら、

「妃奈」

と囁いた。

拾。玖。捌。漆。陸。伍。肆。参。弐。壹。零。

数字を大字表記で思い出して、数えられるぐらいの時間が経った。少なくとも約三十秒くらいだろうか。とにかく長い時間が過ぎたってこと。

徐々に反応を始めた綴木。症状その一、石化したかの如く動かなくなる。症状その二、下から血液が急上昇したのが目に見えて分かるほど真っ赤になる。本当にトマトみたく。頭から湯気が出んばかりの紅さだ。もはや病的。

それから、足すこと10秒。しがらみの糸が切れたかのように突然、綴木は動き出した。

「や、やだなあー！いきなりで心の準備してなかったじゃない！は

「つずかしいなあー、もう！」

顔は紅潮したまま、しきりに体中をぶんぶん振って、俺をぺちぺち叩く。手加減無く叩かれると正直痛いんだけど。

こんな風に表現される綴木の俺に対する純然とした好意は正直に嬉しく思う。でも、俺は答えてやるわけにはいけない。少なくとも両親がこっちに帰ってくるまでは。

「さあ、そろそろいかねえと、マジで遅刻するぞ」

「あ、うん。それじゃあ、腕でも組んでいこうか？」

ちよつと隙を見せるとすぐこれだ。餌は不用意に与えてはいけないという事を再確認する結果となってしまった。

「あ、そだ」

唐突に制服スカートについたポケットに手をつ込む。これ以上時間を食えば、本当に遅刻してしまう。いや、時間がなくなつたのは俺が綴木の話に乗った所為なんだけど。適当にあしらって早い所教室に連れて行こう。

「はい、これ」

ポケットから出し、差し出されたのは一通の可愛らしい便箋。それを手に握らされ、綴木に早く読めと急かされた。一体何だと言うのか。時間が無いので乱暴に封をあけ、便箋から内容が大体想像できるような内容を斜め読みしていく。

そこに書かれていたのは背中がむずがゆくなるような愛の言葉の数々。好きです、愛していますは標準装備。口に出すのが憚られるような過激な言葉が無数に書いてある。

「うう……………」

本当に唸るしかないような手紙。どうした事か。何事か。これはいわゆるラブレター？かなりと特殊ではあるが間違いなさそうだ。

「おい、綴木。流石にこれは引くぞ。しかも書き主の目の前で読ませるなんて私刑に等しい」

こんなもん俺宛に書くの綴木ぐらいしか今のところ思い至らないぞ。見ているだけで顔が熱くなるような手紙を書くのは。

だが、綴木はきよとした顔で眼前で手を振った。

「私のことは妃奈って呼んでって言うてるでしょ。それ、私じゃないよ。いやだなー、今更ラブレターなんて間接的なことしないよ。あ、それとも欲しかった？そうゆうの欲しかった？何だ、言ってくれば百通でも千通でも書いてあげるし、毎日靴箱とロッカーに通ずつ入れてあげたのに」

百通も千通もラブレターもらっても仕方ないし、毎日靴箱とロッカーにそんなもの入れられるのは正直迷惑だ。とりあえず、その問題についてはまた後日話し合う、もしくはそのうち風化するとして、今問題なのはこの手紙の送り主だ。手紙の内容はさっき言ったとおり紙面いっぱいのお愛の言葉。そう紙面いっぱい。つまり、『それ以外のことがまったく書かれていない』訳だ。宛名はもちろん、特に呼び出しやらなんやらは書いてない。このラブレターで伝わるのは誰かが俺の事を好きってだけなんだが……。

「内容拝見つと」

「あ」

気づいた時にはもう遅かった。俺の手中から手紙は消えうせ、綴木の眼前であつた。ヤバイヤバイヤバイ。非常にヤバイ。由々しき事態だ。

ここで小話を一つ、以前にこんな事があつた。今日と同じような五月某日。その時は靴箱に手紙があり、それはラブレターだった。

偶然にも綴木に見つかつてしまい、内容を見る前までは大丈夫だったんだが、読み進んでいくうちに表情は険しくなり、読み終わつたころにはマジギレ。差出人を病院送りにしかけたのを俺が身体を張って止めたあの忌まわしい記憶。もう一度あの悲劇を繰り返すのか！？綴木なら筆跡鑑定でもして、相手を割り出しかねない。

「うわ、すごい内容だね。流石にこんなの私でも書かないよ。それにしてもあんな大人しそうな子がねえ……」

「ひい！！」

ため息をついた綴木に乙女のように高い声で悲鳴をあげてしまっ

た。てつきり怒るかと思ったんだが。いやいやいや、待て待て待て。何かとてつもない勢いで引つかかっているぞ。

「すまない綴木、さっきなんだった？」

「だから私のことは妃奈って呼んでって言うてるでしょ。ああ、私がヤキモチ焼かなかったのを不思議がってるのね。うーん、私も成長してるってことだよ。あと正妻の余裕って奴？」

どさくさに紛れてとんでもない事を言われてしまった。それも後々追求することにしておこう。

項垂れなくなるのを抑え、あっけらかんと笑っている綴木に俺は質問しなおした。というか質問を訂正した。それはもう簡単に。

「その後」

「はてさて、なんだったかしら……」

「今は誰もそんなお約束ボケは期待してねえ!!」

うーん、と真剣に唸り始めてしまった綴木。ボケじゃなかったのか。顎に手を置いたかと思えば、米神に手を当てたり、右上をむいて遠い目になったかと思えば、しゃがんで苦しげに目を閉じる。なんか可愛い仕草ではあったが、今は呼びじゃない。

なかなか答えにたどり着きそうに無かったので、こっちから切り出した。

「お前、これの送り主知ってるのか？」

「当たり前じゃない、何で私がこれを持ってたと思ってるのよ」

いや、それはずつと靴箱を漁っていたからじゃないか、とは口が裂けても言わない。また話を拗らせるのは御免被りたい。

「送り主さんは一年生の光矢 那智香さんよ。かなりおっとり系だけど抜けているわけではない、性格はどちらかといえば甘える方。ちなみに学部は魔術」

簡単に綴木が説明してくれた。俺は後輩にとことん疎い。知ってるのはサッカー部の後輩ぐらいのもんで、先輩も同様。魔術学部先輩はいないが。その点、綴木はそういう人物関係の情報をどこから大量入手してくるので、こういう時は重宝されている。

今年の魔術学部生徒は確か七人。俺らよりも三人ほど少ない。だが、質はそれなりに良い奴が半分、もう半分は最上級という。どうやら水準的当たり年らしかった。

「何にせよ放課後にでも会いに行こうかな。部活前なら大丈夫だろう」

一人でぼやいた。

綴木にはもう聞き慣れた高めの電子音の所為で聞こえなかったらしい。予鈴だ。

「やばい、遅刻するぞ、綴木！」

「じゃ、行こ！」

俺の手を無理矢理とって、引っ張っていく綴木。本当に俺は良い奴と知り合えた。だからこそ、綴木の告白に肯いてはならない。一度断ってしまったのにそんな事、少なくとも俺は出来ない。なにによりこの幸せな時間を崩したくなかったのかも。結局保身だ。俺は何も言わないまま、綴木と手を繋いだまま走っていった。もちろん、速さは綴木にあわせて。

- 102・七月一日(side・S) -

今日も何とか時間内に学校にたどり着けた。まだ少しだけ余裕はある。

私は今、市立の中学校に通ってるわけだけど、もう三年目。つまり受験生。切羽詰ってるわけなんです。

何せ私が受けようと思ってるのは今の偏差値+10はある私立の学校。ホント自分でも恐ろしい決断をし、無謀な挑戦をしているとわかってる。それでも私は兄さんの通っている葉崎高校に行きたい。わざわざ魔術学部でなくてもいい。同じ校舎内なら普通学部でもいい。そもそも、魔術学部の試験をパスしたのは全国でも一握りどころか一つまみぐらいだ。そんなところに兄さんが通ってるなんてすごいだろう。えっへん！って、兄さんの自慢をここでも仕方がいい。

兄さんからこのことは口外禁止命令を受けている。何でも校則で決まっているらしい。兄さんは魔術を使用する人口が少ないが故に学生のころからスカウト等が騒々しくなるからだとか。兄さんに言われたからには私は守る。言いたいけどいえないもどかしさ。なんて辛いんだろう。二人だけの秘密みたいで嬉しくもあるけど。

「おう、どうしたよっ！いつもどおり普通じゃん！？」

とそんな事を考えているうちに隣ちゃんがハイテンションに話しかけてきた。

「隣、その表現だと飛鳥が普段、普通ではないという表現に誤認される。もっとも、飛鳥の性癖には些か問題があるというのは確かではあるが……」

続くようにシニカルな淡い笑みを浮かべながら白音ちゃんもやつ

てきた。

最初にやってきたのは青海 麟ちゃん。何事もテンション重視というかテンションが無いと何も出来ない気分屋な女の子。ショートヘアで、元気をそのまま絵に描いたような容姿をしている。

次にやってきた子が常陸 白音ちゃん。簡単に言うと麟ちゃんの突っ込み役。読書家な所為か、しゃべり方がわりと変な女の子。髪は私より少し長くて、むすんだりはしていない。眼鏡をかけたらものすごく似合いそうな人だ。かけていないのが残念なくらいに。

「てことはやっぱり普通じゃないじゃん！」

「だが、先ほど麟は『いつもどおり普通』といったじゃないか。それでは発言が矛盾している」

日常的な漫談。それなりに楽しいので毎朝傍観しているけど、天然でもよくもこうネタが尽きないものかなと不思議に何度も思う。

「うわー、屁理屈ウゼーっ！」

「屁理屈ではなく論理思考だ。まったく、『麟』という字は霊獣である麒麟からきているが、転じて聖人や英才などにたとえられている。現在の麟からは想像も出来ない。名前負けだな、麟」

勝ち誇り、皮肉った笑みを浮かべる白音ちゃん。名前を蔑むのはどうかと思うけど。

今日もまた白音ちゃんに軍配が上がりそうだ。私の数える限り麟ちゃんの勝利数は三回ほど。白音ちゃんの休みによる不戦勝二回と実力行使が一回。

「トリビアウゼーっ！」

「名前が貶されるのを怒る前に私の知識量を否定するのか、麟は」  
これを聞いてるといつも通りの朝だなあと心底思う。日常って平和だ。まあ、日常とは得てして少しずつ変化するのだけれど、兄さんがそんなことを前に言っていたような、言っていなかったような、やっぱり言っていた気がする。

「そんな事気にしてられねーよっ！お前なんかこうだ！」

突然、麟ちゃんが白音ちゃんのわき腹に抱きついた。客観的に見

るとこの体勢はなんとも不可思議というか奇妙というか非日常的なもの。前にもこんな体勢が二度ぐらいあった。一度目は麟ちゃんが覚えたたてのプロレス技をかけようとしたとき。もっともその時は白音ちゃんが得意な合気道の技で軽くないなされ、未遂に終わったけど。確か麟ちゃん逃げ台詞に、中国四千年の歴史を見せつけんなあつ！とか言ってたな。合気道は起源はアラブでロシアで完成したという誤情報を麟ちゃんに与えていた方が私は印象に残ってるんだだけだ。

そして二度目は、

「や、止める！そんなとこ触ってなんになる！お前の得にはならないぞ！あ、あ、あ……」

「うひゃひゃひゃ。ここか、ここが感じるのか？」

こうやって逃げの一手でわき腹をくすぐる時。麟ちゃんの発言だけ聞いてたら親父的だ。セクハラだ。そんな事はお構い無しにひたすらくすぐりを続ける。むしろどんどん強く、早くなっていく。あれだけ指がしなやかに早く動くなら、ピアノなんかに活かせばいいのに。

白音ちゃんは限界が来たのか声も上げれず、適当な机の上を何度か叩いてギブアップした。笑いをこらえている所為でせつかくのクール&ビューティーなイメージは総崩れ、髪もボサボサになっていた。

「はははー！あたしの勝ちー！」

Vサインを高々と空に掲げ、勝ち誇った笑みを浮かべている麟ちゃん。一点の曇りもない青空のように本当に爽やかだ。やった事は卑怯だけど。

かたや声をあげる事も出来ず、肩で息をしている白音ちゃん。耐え続けていた所為かとんでもない形相だ。特に目が。少なくとも女の子ができるような目ではない。

「ようやく、だが、おは、よう、飛鳥」

白音ちゃんは精神的に落ち着いてきたのか、息は絶え絶えながら

も挨拶をしてきた。顔は既にいつも通りに戻りかけている。

白音ちゃんは四度目の敗北のあとにもかかわらず、普段と変わらない冷静さ。少し息は荒いが許容の範囲内。そんな冷静沈着である白音ちゃんの弱点がよもや、くすぐりというなんとも幼稚な行動とは誰も思いはしなかっただろう。そんな最終兵器を手に入れた麟ちゃん嬉々として使用している。けど白音ちゃんもやられるばかりではない。もちろん合気道の技で応戦している。つまり、力量比が99:1ぐらいだったのが、89:11になったぐらいな訳。なんにしる麟ちゃん、もうちょっと学習能力をつけるべきだよ。

「ああ、そうだ。私は麟などではなく、飛鳥に用があつたんだ」「ん？何？」

思い出したかのように白音ちゃんが私に用件を言い始めた。

「宿題を見せてはくれないか？」

めずらしい。白音ちゃんが私に頼み事をしてくるなんて滅多にない。ましてやそれが宿題の写しだなんて一生に一度あるかないか。よほど切羽詰っているらしい。

「別にいいけど……。どうかしたの？」

「勘違いをするな。写すわけじゃない。少し解らないところがあつたんで、見せてもらいたいだけだ」

それでもめずらしい。私よりずっと勉強が出来るはずんだけど。とりあえず鞆の中からノートを取り出し、ページを開いて手渡した。「ふむ、こう解くのだったか……。やはりすごいな、『飛鳥の宿題』は」

変な含みを持って言わないでほしい。それじゃあまるで、

「この問題を解いた人物はすごいな」

私がやってないみたいじゃない。

「それは私が解いたんだけど……」

「嘘をつくんじゃない」

白音ちゃん、それはあんまりだよ。そんな風に一蹴しなくても。あまりにも無体じゃない、それって？私だって傷つくんだけどな。

「後々誰が見ても解るように細かく書いてある。その上、一度も消したあとがない。飛鳥の成績なら発想さえ合えば解けない事もないが、それでも一度で解くのは無理だろう。ならば、誰かに別の紙に書いて教えてもらい、それを後から写したと考えるのが普通ではないかな？」

白音ちゃん大正解です。その問題はどうしても解けなかったんで、昨晚兄さんにやり方と答えをルーズリーフに書いて教えてもらいました。恐るべき洞察力です、御見それしました。

「それにしてもここまで解りやすくこの問題を解くとは下手な教員よりは数段上だな、その人物は」

本当は誰が解いたか白音ちゃんは察しがついてるのに、あえて個人名は出さなかった。

「どれ、この解法のすごさでも実証してみよう。ほれ、麟。この問題を解いてみる」

そう言うて話の輪から外れていじめていた麟ちゃんの前に教科書のみを差し出した。三秒程度だと思う。その間黙考した麟ちゃんが突如爆発した。

「くわっ！眼がつ！頭がつ！バグるよ、こんな問題！」

頭の上にクエスチョンマークを乱舞させながら、悶え苦しむ。オーバリアクションにもほどがあるよ、麟ちゃん。

「これが解き方と答えだ。読んでみる」

「うひゃー、こんな解き方すんの！？解るわけないじゃん！わたしをいじめて楽しいかコンチクショー！！」

効果のほどはすごかった。普段なら答えを見せられても訳が分からず投げ出すあの麟ちゃんが解き方を理解した。驚きだ。改めて思うけど兄さんはすごい。心底誇りに思う。

そうやって毎日毎日兄さんに感心し、そしてどんどん好きになっていく。そんな日常の中に私がいれることが何よりも幸せだと思える。本当にこんな幸せな妹は世界でも私一人だよ。美しき愛、すばらしい！

「うん、見れば見るほどウロコに目！と言っわけでちょっとばかり借りてくぜい！いやっほーい！」

捨て台詞のように言葉を吐いて颯爽と自分の席に帰っていった。付け加えるなら『目から鱗が落ちる』だよ、鱗ちゃん。ウロコに目があったら怖いよ。

「さて、鱗も席に着いたことだ。HRもそろそろ始まる。私も席に着くでしょう」

そういつて白音ちゃんも席に戻っていった。同時ぐらいに担任の先生が入ってくる。今日も平凡な一日が始まりそうだ。

- 103・七月一日(side・B) -

――放課後。

朝の疲れは昼半ばになると大分楽になり、午後の授業は問題なく受けられた。午前の方はかなり際どかったが、何とか寝ずにやり過ぎた自分は賞賛に値するはずだ。まあ、授業に部活の疲れを持ってくることで体が良くないといえればそれまでなのだが。

ともあれ遂に放課後。出来れば来てほしくなかった放課後。

光矢　那智香という一つ下の後輩に返事を言いに行かなきゃならないんだよな。名前がなかったのだから無視してしまえば良いのだが、そこら辺自分でも驚くほど律儀だと思う。

返事は『交際を断る』って事を要点に言わなければいけない。俺には光矢　那智香と付き合う理由がない。付き合いがない理由は一応あるにはあるが、無理をすれば付き合えないことはない。相手が会うのを制限して我慢できたり、週末にデートできなくてもいいのならばの話だけど。

それは綴木にもいえることだ。表面上の理由は言ったが綴木にはそんなのはあまりにも希薄すぎる理由。だから断る理由がないんじゃないかと、付き合う理由がないと言っべき。人間としてそんなのは悲しい。悲しいけど、理由も無いのに付き合いってそのうち『ハイ、さようなら』で割り切れないと思う。ずっと執着し続け、追い続け、迷惑をかけ続ける。だから今は誰とも付き合い合わない。

さて、こんな風に考えてる間に家に帰られでもしたら文字通り話にならないし、時間の無駄だ。

俺は重い腰を浮かせて鞆だけ持って立ち上がった。部活道具は部屋に置いて来たから、そのまま一階上の魔術学部一年の教室によっ

て部活をしよう。後に残る罪悪感を払拭するには運動が一番のはずだから。

いつもより少しだけリズムの遅い足取りでドアに向かう。熱くもなく、冷たくもない無機なドアに手をかけた。感触がおかしい。いつもと感覚が違ってえらく軽い。空振りしたのかと思ったが、ちゃんと指先には取っ手の温度がある。

ふと、反応が遅れたが俺の前に人がいた。身長は大体130cmぐらいで小柄というより幼児体系と表現した方がシツクリ来る、そんな奴だった。

俺はどういうわけかこの小さいのが光矢　那智香本人だと直感で判断した。直感でもないか、綴木の話からの情報を踏まえているのだから。

「あ、あの、睦月　幸紀先輩です……よね？」

俺の名前を言った後の変な沈黙の所為で、思わず突っ込みそうになった。綴木の所為で突っ込みが癖になってしまったのか？です、の所でもう少し長い沈黙が続いていたら俺は反射的に『俺も睦月　幸紀先輩です』と答えていたのではないかと、その先には緩やかな漫談が続くんだろうななど、どうでもいいことを考えながら軽めに返事をした。

後輩に敬語使うのも変だし、使われた方も困るだろう。

「ん、睦月　幸紀は俺だけど、君は光矢　那智香さん？」

「いえ、違いますけど……」

妙におどおどしながら即答で否定されてしまった。見事なまでに直感が外れた。スポーツマンとして致命的な何かを感じるぞ。こういうときの人物当ての直感というものは大抵当たるはずなんだけど、アレは空想世界だけの話か。こんな事を間違えるなんて何となく恥ずかしい。

「私は伯耆　里奈って言います。事務員の先生とさっき言ってたなち——いえ、光矢さんからの伝言で来ました」

こほん、と咳払いをして改まった様子でしゃべり始めた伯耆さん

の話に黙って聞いた。間に入れる必要のある、もしくは間に入れる言葉があるわけでもないし。

「まずは、先生からの伝言です。偶々通りかかったら、ちょうどいいと押し付けられてしまつて……。今日は部活動を行わず、まつすぐ家に帰つてこいと事務の方に連絡があつたそうです。連絡相手はこの学校の大抵の教師の知り合いだから行つてみれば分かる、とも」  
はて、そんな顔の利く人物が俺の知り合いにいただろうか？ サッカー部の先輩だろうか？ 先代の部長が何かとサッカー部をたずねて来ることはあるが、個人名で呼ばれたのは初めてだ。そんな悩んでる俺を尻目に話を続ける伯耆さん。偶然先生に伝言を頼まれたのなら、今から話す光矢さんのことがメインなんだろう。心して聞く。  
「光矢さんの用事はその、あつと、えつと……。手紙読みましたか？」  
遠まわしに聞いたつもりなんだろう。でも逆にストレートすぎるよな、この聞き方。

ともかく綴木の情報は間違つてなかつたという事か。心のどこかで嘘なんじゃないかと疑つてただけど、これで間違えなく本当とということが分かつた。綴木がいたからよかつたものを送り主の名のない手紙では悪戯かと思われても仕方ない。内容があれなら尚更。まあ、気づいてないみたいだから言わないでおこう。

「ん、読んだよ」

「そうですか……。だつたら分かりますよね？ 私が何言いたいのか分かりますよね！？」

見る見るうちに赤くなつていく伯耆さん。言うのが恥ずかしいのは分からなくもないが、そんな小さく赤くならなくても。書いたのは自分じゃないんだから。それに、下手に声を大きく行つてしまつた所為で、周りの注目の的なんだが。せつかくできるだけ軽い調子で言つて、さりげない会話を心がけた俺の苦労は水の泡か。

「うん、大体分かるけど」

「じゃあ、黙つて私について来て下さい！」

ある意味プロポーズだよ、これ。言われたこちらとしても恥ずか

しい事この上ない。いや、勝手に連想した俺が悪いのか。事情の分かってる俺と綴木はいいが、客観的にみると伯耆さんが俺に告白したように見える。後で誤解を解くのはとんでもなく面倒そうだ。

案の定、その他諸々の生徒（背景ともいう）からは、

「綴木 妃奈に強敵出現か!？」

「さあ、睦月是不倫をしてしまうのか？その答えはいかに!？」

「何でお前ばっかりもてるんだー!」

などと罵声が飛ぶ。七割は何故か綴木との関係の野次であり、綴木の作戦は成功してりるのはこの際、気にしないでおこつ。とりあえず、俺が今とるべき行動は……

「てめーら、うつせーよ!」

怒鳴りながら逃げる事だった。もちろん伯耆さんを連れて。

- 103・七月一日 (side・S) -

——昼休み。

午前中の授業がやっとのことで終わり、みんながみんな、いや、少しぐらいは例外はいるけど、笑顔をほころばせて疲れを取っている。

友達と食事する人。

恋人と談笑する人。

後輩に呼ばれる人。

他クラスへ行く人。

実にさまざまな人々が無秩序に混在する中、今日もまた壮絶な戦いの幕が切って落とされた。

「イヤッホーイ！ウインナーゲエエツト！！」

麟ちゃんが緑色の可愛げな箸で白音ちゃんの弁当箱から俗に言う赤いタコさんウインナーをつかみ上げ、けたたましいシャウトで勝利宣言をした。ロボットアニメ顔負けの壮絶なパッションだ。

「ふん、甘いな、麟」

ウインナーを取られた白音ちゃんは皮肉った笑いを浮かべ、勝利に酔っている麟ちゃんのがら空きの弁当箱からアスパラのベーコン巻きをさらっていった。

両方質量的には大差はないけどアスパラのベーコン巻きは麟ちゃんの大好物。勝敗は歴然だ。

そんな二人の対決を誰も止めようとはしない。止めようとすれば、何を今更という目で見られ不思議がられるし、何より自分の弁当を取られかねない。だから二人のこの対決はほとんど学校名物となっていた。何せ、空想世界ならまだしも本当に弁当の取り合いをする

奴なんて早々はいない。

勝負の発端はいつも麟ちゃんが白音ちゃんの弁当を取ることからはじまる。これは単なる食い意地の張りすぎが原因。その反撃として白音ちゃんは大体同質量で麟ちゃんの好物をサツとさらう。最小限の行動で最大限の効果を生むベストな戦法。白音ちゃんが反撃するのは食い意地のためではなく、麟ちゃんを放置しているといつの間にか全て食べられてしまうから、見せしめとしてだけど。

「NOooooh！あたしのアスパラとベーコンがあ！」

「以後懲りて止める事だな」

いつもと同じ白音ちゃんのそのセリフで試合は終了。今回は朝と違い、白音ちゃんの完全勝利。

ようやく落ち着いて食事が取れるようになったので、二人に私は近づいていって弁当を広げた。いつもと同じ兄さんが作ってくれた、どこで広げても恥ずかしくない最高の弁当。と言うわけで二人の標的は時々私になってしまいうけである。

「今日はメインはエビフライか」

私が弁当を広げたのを見て白音ちゃんが横から口を出した。

白音ちゃんが言ったとおり今日のお弁当はエビフライメインのお弁当。メインのエビフライをはじめ、卵焼き、にんじんのグラッセ、セロリのチーズ巻きなどが所狭しと並び、いろんな味が楽しめるようにと少量ずつならべてある。

「お、これはまたまた美味そうな弁当！いただきっ！！」

箸を伸ばしてくる麟ちゃん。だからといってされるがまま、盗られる私ではない。

麟ちゃんの狙いはおそらく卵焼き。その軌道を予測して麟ちゃんの箸を自分の箸で止めた。行儀は悪いが、これも兄さんの弁当を守るため。許してください、神様、仏様、お兄様。

私の予想はぴたりと当たり、しっかりと勝利を収めた。ごめんね、麟ちゃん。世の中は残酷なんだよ。さて、勝利者の私は優雅に卵焼きの味に舌鼓を打とう。

「って、あああー!!」

私が麟ちゃんの箸を押さえている間に白音ちゃんの箸がしっかりと一つしかない卵焼きを捉えていた。

呆然としているうちに無情にも白音ちゃんの口の中に収まってしまった私の卵焼き。何て世の中は残酷なんだろう。

「ああ、私の《愛しい卵焼き》が……」

「ああ、あたしの《美味しい卵焼き》がー!!」

「ふむ、調味料の塩梅も焼き加減も絶妙だ。美味かな、美味かな」  
三者三様に反応を見せた。ついでに言っておこうと思うけど、麟ちゃんの卵焼きではない。そこら辺はつきりさせておく。

いくら穏和な私であってもこればかりは許せないよ、白音ちゃん。皆さんもそう思いますよね!?ね!?と言うわけで私はプチ切れ状態と化す。エビフライをとられていたら、『プ』が『プ』になつてゐる所だっただけ。

「いや、本当に飛鳥の兄君は天才だな。飛鳥の話聞く限りでは容姿端麗、頭脳明晰。申し分ないな」

が、シニカルに笑いながらそんなことを言われただけで鎮静化してしまう私の感情。アップダウンが激しいと言うなかれ。これはもう生理的というか、条件反射というか、とにかく遺伝子レベルで組み込まれた宿命なのだ。

完全にこうすれば私が収まると知っていて卵焼きを取った白音ちゃん。前々から分かっていた事だけど侮りがたし、青海 白音!

「前々から思っていたんだがな、飛鳥。私はお前のあに——」

「おおおっと、白音!それから先は禁句だぜえ!何故ならああああ!」

麟ちゃんは白音ちゃんの言葉を静止した後に五秒ぐらいのタメをおく。

「あた——」

「『あたしが前々から言おうと思っていたからだ』だろう?」

そして、そのタメは長すぎたが故に白音ちゃんにばっちりタイミ

ングを合わせてかき消されてしまった。これは当分続きそうな白音ちゃんの逆襲方法。これより先、麟ちゃんが言おうとしたことは全て予測され先に言われるという一種神業的な逆襲だ。

「というわけでだ、飛鳥。私と麟はお前の兄君が見てみたいんだ」「駄目」

即答却下。兄さんに会わせれば忙しい兄さんの邪魔をすることになる。それは避けたい。私は取り繕うように、誤魔化すように、逸らすように、次の言葉を発した。

「さ、早くしないとご飯食べる時間なくなっちゃうよ。この話はおしまい」

二人は納得できないような顔で自分の弁当に箸をつけるのを再開した。

このとき私は決定的なことを見落としている事に後々気づいた。

二人が話してもいないのに個々で私の死角でほくそえんでいた事を。そして、二人がこの程度で諦める性格ではないという事を。

- 104・七月一日(side・B) -

「まったく……那智香が不憫でなりませんね」

ため息を漏らしながら伯耆さんは独り言のように呟いた。まあ、まったく持ってその通りだとは思うが……。何せ、今から告白しようという人間が自分と友達を間違えたのだ。つまり知名度ゼロ。この時点でかなり結果が見えている。おそらく伯耆さんの言葉はその事を察してだろう。最も今のところ、誰とも付き合う気はないのだから関係ないといえば関係ないのだが。

それにしても、二人きりになった途端、突然口調が変わったな。

細かい事は気にせず、とりあえず現状はこう。『光矢さんの友達の伯耆さんが俺を迎えに来て、何だかんだで逃げてきたら待ち合わせ場所とはまったく逆方向に来ていた』と。つまり俺のミス。俺は一体今日いくつミスしたんだか……。

因みに言うなれば、私立葉崎高校という学校は無駄に広い。魔術学部併設に伴い、機密性の保持の関係上から、莫大な資金の援助と校舎の新設が行われた。結果、この学校はそこら辺の二流大学なんか比べ物にならないくらい広いのだ。

「うん……そう。今からそっち行く。すぐ連れてくから……じゃ」

いつの間にか電話をかけていた伯耆さん。相手は光矢さんだろう。こんな風に連絡携帯を使う事も普通。不思議に思うかもしれないが、これも校舎が広いゆえに許された特別である。例外として魔術学部にはバリアが貼ってあり圏外となるが。

「さて、早く行きましょう。那智香が待っています」

それだけ言うと、返事も聞かずたすたと先に歩き始めてしまった伯耆さん。心なしか怒っているようにも見える。……理由は明白

か。

ひたすら静かに、ひたすら素早く、ひたすらまっすぐ歩き続ける  
伯耆さん。

何と言つか間が持たないな。正直言うと伯耆さんの雰囲気があま  
りにも刺々しい。ここは何かひとつ話をして場を暖めるべきか……。  
いや、暖めてどうするよ。伯耆さんと和むのか？ んで、光矢さんの  
もとにつく頃には仲良しこよしってか？

……嫌だ。あまりに嫌過ぎる。俺にとってではなく、光矢さんに  
とって。初対面のはずの友達が自分より仲良くなってた日には、泣  
きたくもなるだろう。ここはやはり無難に光矢さんのことでも聞  
いて均衡を保とう。それが一番いい。

「あのさ、光矢さんってどんな子なの？」

「それは自分の目で見るなり、本人に聞くなりしてください。その  
方が那智香は喜ぶでしょうし、私にその質問をするのは無意味です」  
無意味って、おいおい。普通こういうのって、友達に聞くもんじ  
やないのか？ 少なくとも本人に聞くもんじやないだろう。と、心  
中で伯耆さんの刺々しい言葉に突っ込みを入れつつも俺はめげない。  
必死に会話を続けようとする。

「喜ぶとかそういうんじゃないさ……」

「じゃあ、どういふのです？」

「強いて言っなら……いや、違う違う。とにかく君からの見解が聞  
きたいだけ」

「だから無意味です。私の意見には主観が入ります」

伯耆さんは冷たく、事務的に言い放った。俺も負けじと変な意地  
で言い返す。教室でみたあの恥ずかしがりな感じの伯耆さんは何処  
へ行ったのだろうか？ こう猫をかぶる子だとは思いつかなかった。

「主観とか無意味とかって……、まったく機械みたいな言い方しな  
くても」

「仕方ありません、私は機械なんですから」

「は？」

「何度も言わせないで下さい。私はいわゆるアンドロイドという奴です」

「はは、面白い冗談だね」

「あたりまえです、冗談ですから」

……正直、伯耆さんの口から冗談という言葉が出てきたとき、時間が止まったかと思った。あまりにシユールだ。シユール過ぎるギャグセンスだ。というか、どのタイミングで笑って言いのかわからねー！

実際のところは止まったりせず、刻一刻と過ぎてゆき、俺と伯耆さんはしっかりと地に足つけて歩いている。なんら変わらない。付け加えられたものを強いて言うならば、二人の間に痛々しい沈黙が新たに横たわったぐらいか。

カムバック、教室でひたすら照れていた伯耆 里奈さあーーーーん！！

お約束の心の中での絶叫も終わったところで、さて如何したのか。

「あなたは……那智香をどう思っていますか？」

静寂を破ったのは意外や意外、静寂の元凶のご当人であった。

「あんな手紙を送る鬱陶しい子ですか？その手紙に名前を書き忘れる落ち着きのない子ですか？友達をよこして自分では会いにこれない臆病な子ですか？それとも……その他？」

「未回答が駄目だとするならば、『その他』にはいるんだろっな」

俺は興味なさそうに——いや、興味ないからそっけなく答えた。

というか、興味を持つ要素を伯耆さんが無理矢理断ち切った気がするのだが。それに名前の着描き忘れ、気づいていたらしい。

俺の答えを聞いてか、意を決したように伯耆さんは立ち止まる。急に立ち止まられたのでぶつかりこそしなかったが、かなり近い位置に立つ事になってしまった。

至近距離で振り向いた伯耆さんの顔は怒りでも照れでも悲しみでもない——なんとも形容しがたい笑顔が浮かんでいる。笑うことに

なれてない奴が無理して笑った笑顔を想像してくれば、それで大体会合致するだろう。

「一ついいこと教えておいて上げます」

「ん？」

伯耆さんが近くにいるからといって取り乱したりはしない。話しやすい距離をとるため後ずさりながら適当に返事しておいた。

「伯耆 里奈なんて人は存在しません。ここに居るのは当のご本人である光矢 那智香ちゃんです」

「あー、はいはい」

また冗談だと思い適当にあしらう。

だが、伯耆 里奈——自称、光矢 那智香の目は真剣そのもの。自分に人を見る目があるとか、嘘を見極める判断力があるとは到底思えないが、自分の感じたことを信じるくらいのことは出来るつもりだ。

「あなたが最初に私のことを光矢 那智香だといったときは心底焦りましたよ」

「まあ、君の言っている事を信じるとして、この行動に何の意味があつたんだ？」

他人の名前をでっち上げ、携帯電話を使って演技をし、綴木や知り合いに見つかればそれではまうという穴だらけの計画を実行する必要性とメリットが少しも感じられない。そんな俺の悩みをいともあっさり打ち払うかのように光矢さんは答えた。

「恋する乙女が相手にどう思われているか知りたくなっちゃ、変ですか？」

あまりにあっけらかんとした光矢さんの言葉と笑顔につられ、俺は思いつきり笑った。たはは、と綴木の真似をするような感じで、周りの目を気にもせず、思い切り。

「まあ、今じゃそんなの無駄だったって分かりましたけどね」

笑顔は崩さず、友人と遊びに行く算段でもするかのような気軽さでは無しを続ける光矢さん。

「あなたはいくら時間が立つても私を振り向かない。だから脇役は退場する事にしました。後はあなたの選んだヒロインと勝手にイチヤイチヤしてください。それじゃ」

早口にそれだけ言って、少女は走って行ってしまった。俺の見える範囲で彼女は涙は見せなかった。見えなくなっただ後では知らないが。俺は、光矢さんを――若しくは伯耆さんを追いかけるような事はしなかった。

それから少し経ってから、そういえば早く帰ってくるよう言われていたのを思い出し、早々にクラスに戻って帰る準備をして校門を出る。今日の出来事など無かったかのように俺は歩み始めた。

後日談。伯耆さんという人物はこの学校には在籍せず、光矢さんは演劇部所属だったらしい。その事を考えれば、携帯電話の演技や最後の台詞に『脇役』やら『ヒロイン』という言葉が出てきたのは不思議ではなかったのかもしれない。結局、俺は彼女のことについて何も知りはしなかったが、彼女の人生に幸多からんことを、ななてな。

- 104・七月一日 (side・S) -

――放課後。

クラブに入っていない私は必然的に帰宅することになる。もちろんの如く、面倒な委員会なんかも入ってない。

もっとも、クラブに入ってもそろそろ引退の時期。窓の外、教室から見えるグラウンドの上では最後の大会などに向けて一心不乱に練習し、汗をかいている。

うちの学校のグラウンドは狭いので運動部の使用は交代制。今はちょうどサッカー部だった。

(サッカー、か……)

兄さんは今頃、部活をしているのだろうか？それともまだ授業中？たぶん授業中だね。中学なんかと違って、授業数も断然多いし。帰ってくるのは今日も遅いんだろうな……。なんか憂鬱、なんか暇いやいや、暇じゃない。受験勉強しないと。兄さんの学校のボーダーラインにかすっても無いんだから。

「何、黄昏てる。早々に帰るぞ」

思考に耽っていると白音ちゃんが声をかけてきた。

「似合わない事この上ないな」

「大きなお世話」

軽口の叩きあい。いつも通りの筈なのにどこか違和感を感じた。何か不足している気が……。いや違う、正確に言うなら物足りないといった感じ。何かを忘れてる気がして仕方ない。

何の気なしに白音ちゃんから少し目を逸らしてみる。そして理由を発見した。

隣ちゃんがいる。懐いてない猫みたいに警戒している隣ちゃん。

警戒しているので当然、借りてきた猫のように静か。ためしに隣ちゃんに向かつて手を延ばしてみる。引っかかれた。フー、って鳴いている。

「猫がいるーっ!!」

そう叫ばずにはいられない。当たり前の事だけど、隣ちゃんの頭の上にはクエスチョンマークが乱舞している。私からしてみれば、手を延ばしただけで引っかかれた時点で、こっちが疑問符を浮遊させたい気分なだけだな。

白音ちゃんにいたっては、腫れ物を見るような哀れみの目で私を見ていた。酷い、あまりに酷すぎる仕打ち。仕舞いには、

「病院へ行こう。大丈夫、私の知り合いの精神科医だ。信頼は出来る。私はどんな事があっても友達だ。だから、さあ」

と言い出す始末。白音ちゃん、引っ叩いてもいい? という言葉を何とか嚥下し、グツとこらえる。

ところで、何で白音ちゃんに精神科医の知り合いがいるんだろう? そこら辺を追求しても面白そうに思えるけど、あいにく私は面白いからといって行動に出るタイプではない。たと言ったとしても、適当に言いくるめられるのがオチだ。下手をすれば自分に矛先が変わっているだろう。そんな面倒な事は避けておきたい。

「まあ、そんな下らない事はおいというて」

白音ちゃんが両手を左から右へと弧を描くように動かす。いわゆる「おいというて」のポーズだ。そういえばこの動作に正式名称はあるんだろうか? 少なくとも私は知らない。なんとなく気になる。そんなことをボーっと考えてみた。結局知ったところで誰も使わないと思うけど。一種の知的欲求と処理して脳の外に掃き捨てた。

「今日はどこかによっていくのか?」

「うーん、もう受験も近いし、まっすぐ帰ろうと思ってたんだけど……」

正直言つと遊びにも行きたい。けど、どう考えても勉強量が私には足りていない気がする。実際のところは人一倍しているはずだけ

ど、目指す所が目指す所だし。勉強量に比例して成績が上がる訳でもないというのを知っている。

受験というものはいくら学力が高くても、ほんの少しばかりの例外を除いて勉強を志望校と似合うだけの勉強をすれば受かる。そう兄さんが言っていた。兄さんもその例に漏れなかったとも。

漠然とした不安。

雲のように掴み所がない、消えない、消せない不安。そんなものが心の奥の方にわだかまっていた。いくら兄さんの言葉があっても。

「たまに気晴らしも必要だぞ」

「でも……」

「家にこもって勉強するばかりが良いとは限らん」

「なんか言葉遣い変だよ、白音ちゃん」

ん、そうか、といって首をかしげながら、奇異な点を修正しようと努力しているらしい白音ちゃん。

確かに言葉遣いも変だけど、可笑しいのはそれだけじゃない。いつもならいくら弱々しくとも否定すれば、引くはずの白音ちゃんがこう押してくるのは違和感が塊で転がってくるぐらい変だ。

「どこか行きたいところでもあるの、白音ちゃん？」

「ん？あ、ああ、少しだけな」

熟考していたのか、白音ちゃんの反応が少し遅れた。それを取り繕うように言葉を繋ぐ。

「だから、商店街の方まで行かないか？」

「わかった」

白音ちゃんから誘ってくるなんてめったにないことだし結局、私は誘いを承諾した。

荷物をサツとまとめて席を立つ。そのまま白音ちゃんの横に立ち、教室から出――

「って、ナチュラルに無視すんなーっ!!」

――ようとした所で隣ちゃんが爆発した。ちっ、ばれたか。

「お前らは悪魔かつ！！私がいくらナチュラルな存在だからってなめんな、コラーツ！！」

「なんだ、居たのか」

あくまでそっけなく、静かに対応、いや、挑発する白音ちゃん。

本日の第二ラウンド勃発！カーンッ！

「居たのか、じゃねーだろっ！あたしは空気かつ！」「良かったな、みんなに必要とされているぞ」「肯定すんなよっ！」「嬉しくないのか」「喜ぶ奴の顔が見てみたいよっ！」「私は条件によれば嬉しいぞ。さあ、私の顔を篤と拝むといい」「ふざけてんのかよっ！」「ああ」「肯定すんなよっ！」「同じ台詞を二度言うのは文脈上好ましくないぞ、麟」「キャラクターの分際でそんなこと気にすんなよっ！」「なんとも珍しい。麟が私に突っ込みを入れるなんて」「あたしのボケは無視かよっ！」「ああ、当然の如く無視だ」「マジかつ！」「ああ、大マジだ」「酷っ！」「ああ、酷いな」「訂正は？」「どれについても無理」「さらに酷っ！」「まあなんにしてもだ。この書き方は読者の方々に多大なる迷惑をかけていると思うぞ、麟」「読者ってなんだーッ！」「キャラクターとか言って貴様が言うか」「言っわっ！」「まあ、そろそろ麟の戯言に付き合うのにも飽きたな」「戯言とか言うなよっ、仮にも友達だろ」「仮なのか」「いや、違うけど……何っ！か言葉の綾だよっ！」「驚きの連続だな。言葉の綾という言葉を知っていた君にビックリだ」「馬鹿にしすぎだろっ！」「ああ」「馬鹿にして面白いかよ、お前は」「腹がよじれて筋肉痛になりそうなほどに」「まったく笑ってないぞっ」「心の中で嘲笑ってるんだ」「笑いの種類が間違ってる」「きつと読者はもう私がどちらか分からなくなっているに違いない。私が麟だ」「嘘つくなよ。あたしが麟でお前は白音だっ！さらに混乱さすな」「読者に対する突っ込みはもう無しか」「ところで、これってどうやったら勝ちになるんだ」「戦いに明確な勝ちなどないのだよ、麟」「お前は——」「それ以上言うな、著作権に係わる」「どうで

もいから勝敗決めようぜえー。そうしないとあたしの目が妖しく光る」「お前の意味の取れんボケなど聞き飽きた」「もう何でもいから、勝敗——」「フン!」「ヴッ!? 何でいきなり右フックを私のミゾオチに……?」「被害者なのに説明ありがとう。言うなれば先手必勝という奴だ」「今までの、話し合いに、何か意味あったのか……?」「この世には意味のあることのほうが少ないんだ、麟」「酷すぎ、だろ……」「安らかに眠れ」「勝手に、殺すな……。でも、マジ、死ぬかも」

決め台詞を白音ちゃんが言い放ち、麟ちゃんは糸の切られた操り人形のようにばったりと倒れた。

読者の皆様、このわけの分からない対決に付き合ってください誠にありがとうございます。作者に代わりこの私——睦月 飛鳥が謝罪いたします。すいませんでした。心よりお詫び申し上げます。

—●—

麟ちゃんが回復するのを待つてから、白音ちゃんとの約束どおり商店街まで出てきた。

お約束のようここで第三次七月一日戦争が起きたのは言うまでもない。だが、あまりにも理由が馬鹿らしいので割愛させていたきたい。結果だけは簡単に伝えておきたいと思います。

麟ちゃん、大破（常人なら再起不能）。教訓として、白音ちゃんは敵に回してはいけない、としっかり頭に刻み付けた。

- 105・七月一日(side・B) -

今日も学校が終わり、ようやく家の前まで帰ってこれた。時間は大体五時。伯耆さん、いや、光矢さんと別れて教室へ帰ると、待っていたのはクラスメイトからの詰問の荒らしだった。特に綴木。一字一句会話を聞きださんばかりの勢いで、質問をされた。何が正妻の余裕だ。あの分なら隠れて着いて来てもまったく不思議ではない。

そのときに伯耆さんはこの高校に在籍していなかった事や、光矢さんについても色々利いた。どうやら綴木も半分ぐらいグルだったらしい。光矢さんの裏切りはあったようだが。しかしながら、結果として綴木は満足らしい。人が降られておきながら満足って、趣味が悪いぞ、綴木。

ともあれ、綴木が教室から出て行った後、俺も続くようにして教室を出た。そのため、変える時間が随分とずれてしまった。俺が部活も無く帰った時間から差し引きすると30分近く待たせたことになるだろう。父親関係のお偉いさんだとしたら大惨事だ。

まず謝った後、遅れた理由を説明して……と、計画を立てつつ、家の鍵を取り出す。この時間だとまだ飛鳥は帰っていないかったはずだ。どこか寄り道して変えるのは常々の事。誘ってくれる良い友達を持っていてらしい。今度飛鳥の日頃のお礼くらい言っておきたいものだ。いや、それは余計なお世話というものか。俺だって父さんがいきなり綴木にお礼なんて言い始めた日には次の日から学校に行けなくなるぞ。

こんなところであまり時間をとる訳にはいくまい。さっさと鍵を出し、錠を開ける。がちりという金属音が鳴ったのを確認してから、

戸を引く。当然開くものとしてドアを引いたのだが、ドアは鍵の閉まったまま、家の中に入れることは無かった。

どうやら、飛鳥が帰ってきているのか。可能性はある。俺にだって部活を休んで帰って来いといわれたのだから、飛鳥にだって呼び出しがかかったのかもしれない。若しくはお客が鍵を持っていてそのまま入ってきたという場合も十分に考えられる。

お客が先に入った可能性のほうが若干高いか。鍵を持っていなかったら、玄関先で待っているはずだ。だとしたら知り合いなのかもしれない。

もう一度鍵をさして、開錠する。今度はすんなりドアは開き、俺は家の中に入ることが出来た。

挨拶もなしにずかずかとリビングへと進む。そこは勝って知ったる我が家、いちいち周りを窺ったりはしない。玄関においてあったブラウンの編み上げブーツで俺は大体、相手が分かっていた。分かっているだけに気持ちが急ぐ。

バリアフリーもリビングへの内開きのドアを開くと、明るい光が目に見え込んできた。

「よお。久しぶりだな」

スタツカート標準装備のようなインパクトのある声。白いショートパンツとタイトな黒いラバーシャツのコントラストが焼きつくような印象。ちょうど僕から正対するようにしてソファーに不遜な態度で素足を組みつつ、こちらを爛々たる眼光で低い位置にいるにもかかわらず尊大に見下ろし、射抜く。

決めの細かい肌で覆われた素足を解き、掛け声も無く立ち上がる『彼女』。自己主張しすぎた胸の前で腕を組み、フローリングの床を歩いてくる。板張りの床がみすばらしく思えてくるほどの美貌。もつとも、この人に合う床なんて宝石のみで出来たような輝きを放つ床ぐらいのものだろう。

「どうしたよ、感動の再開に声も出ないか？ん、どうしたよ、幸紀？」

彼女、東雲 在逢ことアリアさんは俺の目の前でにたにた笑っていた。

正直、あまりにも予期せぬ相手だった。編み上げブーツなんて格好つけたものの履く知り合いなんてアリアさんぐらいだから予想は出来たが、何しろ三年ぶり、まさかと思った。正直もう帰ってこないと思ってたし。

幼少から隣家に姉貴分として暮らしていたアリアさんが一月ばかり世界を見てくるといって、ハンドバック一つでアフリカ最南端喜望峰へと向かう船へと旅立ったのが三年前。しかし、悲劇的にも喜望峰目前、マダガスカル沖でアリアさんの乗った船が沈没。不幸中の幸い、無人島の近くで沈没したため流れ着いて一命は取り留めた。船は沈没前に救難信号を出していたため、すぐに救出されたい。だがしかし、アリアさんはその救出船から脱走。もう一度、無人島へ泳いで渡り、1週間ほど生活した結果飽きたらしく、筏を作ってフリカ大陸に上陸。当然のことながら入国手続きも何もしていないので、不法入国で地元警察に拘束され一日ばかり牢獄生活を乐しんだ。その後、即釈放され、熱烈な持て成しの中、隣国に移動。釈放の理由は不明。この国で俺たちに一度連絡をよこしてきた。船が沈んだと聞き、一日千秋の思いで安否の連絡を待っていた俺たちは普通に喜んだ。だが、上記のような冒険譚を一方的に話したのみの連絡だったので現在位置もなにも分かったものではなく、以降二ヶ月消息不明。本人の話が本当なら、アフリカを徒歩と不正規な移動手段を用いて、北へと移動。アフリカ大陸北端まで何と三ヶ月も掛かったらしい。北端にてもう一度俺たちに連絡。しばらく、若しくはもう帰らない旨を一方的に告げ、連絡を一切途絶えた。つまりまたもや消息不明。でもって二年九ヶ月というとてもないブランクはあるが、現在に至ると。まったく、そろそろ忘れそうになっていた頃だ。忘れた頃にやってこなくて良かったと心底思う。忘れてたら

今頃俺は首から上がなくなっているかもしれない。

「アリアさん、ひさしぶり」

「えらく素っ気無いな。昔は『おねえーちゃん』ってよたよたくつついてた頃が懐かしいよ」

「そんな頃はないですっ！」

まったく、容姿から内面まで何一つ変わっていない。それが良い事なのか悪い事なのかは分からないけど、とりあえず俺はうれしく思う。

「ん、それにしてもおっきくなっただな。私と背がほとんど変わっていないじゃないか」

ちなみに言っておこう。アリアさんは俺より背が高い。モデルのスカウトもされたことがあるらしかった。

「ま、そんな事はおいておいて」手を、右から左へ動かすジェスチャーをしつつ、アリアさんが言う。「飛鳥は？まだ学校？」

「あ、はい。もうすぐ帰ってくると思いますよ」

「いや、そういう意味じゃなくて、まだ学校に通ってんのか、って意味で聞いたんだけどな。通ってんならいいや。そういや、私がこっち離れた時、まだ小学生だったんだから、当然義務教育か」

何が当然だか。日本における最終学歴小学校卒業のクセをして。

中学校中退、高校中退、大学中退と名門校の魔術学部に通りつつも全て『飽きた』の一言で中退したアリアさんが言つと違和感たっぷりだ。

「んで、お前は……うげ、葉崎なんて通ってんのかよ、ダッセ。魔術学部に行くとか言っただけじゃなかったっけ？私の後を追って。んで、落ちて

滑り止めの葉崎に行ったと」

「アリアさんの後なんて追ってません。ちゃんと魔術学部にも通りました」

あ、言った後で気づいた。魔術学部は二年前に出来たから、アリアさん知らないんだっけ。一つ付け加えておくと、制服見て葉崎は

ダサいとか言わないで欲しい。地味ではあるが、地元ではそれなりに人気があるのだ。きっとアリアさんの言ったダサいは葉崎高校に通っている事自体を指しているのだろうけど。

「なんだ、通ったのか。じゃ、何で葉崎に？あ、飛鳥にでも泣き付かれたか？」

そんな言い方をされるとは心外だ。それではまるで俺がシスコンみたいじゃないか。

「新しく葉崎高校にも魔術学部が出来たんですよ。自宅からも近いですし、金銭面を考えて葉崎に行く事にしたんですよ」

「金銭面なんて女々しいねえ……」

そんな風のため息をついたアリアさん。聞かなかったことにしよう。アリアさんだって本気で言ったわけじゃないだろうし。

「それで、この度はなんで帰ってきたん——」

「ただいまー」

と、ちようど言いタイミングで飛鳥が帰ってきた。声色はいつも通り、明るい。今日も何事も無く学業と遊びを満喫してきたらしい。そういえば、玄関に編み上げブーツを置きっぱなしだ。飛鳥は一体アリアさんを見てどんな反応を見せるだろう？きっと驚くはず。もしかしたら怖がるかもしれない。飛鳥はアリアさんを苦手っぽく見てたしな……。

突然聞こえる、ドタドタという走るような足音。やっぱり飛鳥も同じ人物に思い至ったんだろうな、と思いつつ、どんな驚き方をされても良いように俺は覚悟を据えるのだった。

- 105・七月一日(side・S) -

私は麟ちゃん、白音ちゃんと商店街前で別れ、家へと徒歩で向かっていった。商店街から家までは約三十分。ちょっと遠いけど、バスを乗るのはお金がもつたないし、ここから一番近いバス停に行つて家から最寄のバス停で下車して帰宅するまでは大体十五分くらい。十五分くらいなら、兄さんも帰ってきてないから、大差ないよね。

スタスタスタ。スニーカーでアスファルトの上を歩む。真夏まじかの初夏。心地よいとはいえないけど、熱すぎるわけでもない温い大気が肌に張り付いてくる。そのくせ、時々吹く涼しい風は春の陽気に続くくらいの心地よさ。私としては秋が一番好きだけど。

商店街の活気を離れ、だんだんと周りが閑静な住宅街に変貌してきた。私の家はどちらかといえば住宅地奥にあるから、もうちょっとかかる。

「ふう……」

もう大分歩いたはずだ。ちょっと疲れてため息が漏れる。鞆も重いな……。

こういうとき兄さんがいてくれたら、すぐに察して持ってくれるんだけどな。いや、あんまり甘えちゃいけないよね。でも、兄さんが優しくしてくれたときのことを考えると、自然と笑みがこぼれてきた。

あ、あんまり路上で一人で笑つてると変態みたい。頭を切り替えよう。

帰ったらまずは、お弁当箱を水につけて、部屋に戻ってから勉強を始めよう。今日は計画だと数学。苦手だからしっかりしないと。兄さんが帰ってくるまでは多分二時間半ぐらいはあるはず。それま

でに分からないところを纏めておいて、兄さんが暇なようだったら聞こう。でもきつと疲れてるからなるべく、聞かないように頑張ろう。そうすれば成績も伸びて一石二鳥。あ、そういえば洗濯物を入れるって言うのを忘れてた、危ない危ない。疲れて帰ってきた兄さんにさらに洗濯物を取り込むなんてさせられない。兄さんは私は受験なんだから、自分がやるって言うけど甘えてられない。ご飯の準備とか、お弁当とかも出来たらいいんだけど……やっぱり料理は苦手。最近勉強も思うように伸びてないし、憂鬱だな。

「はあ……」

さつきとは違う重いため息。それと同時に家の前に着いた。

兄さんに落ち込んだ顔を見せるわけにもいかないし、もう一回切り替えよう。さ、笑顔笑顔！

兄さんはまだ帰っていないので、私は靴から鍵を出し、慣れない手つきで錠を開ける。ほんのちよつと前まで鍵なんかもっていないかった私に、いきなりそんな習慣が押し付けられて、少しだけ寂しさを感じる。さらに家に家に帰ってきたとき、おかえりなさいと誰も言ってくれないのはもっと寂しいけど。

モダンな合金製の扉に手をかけて、力なく開く。

「ただいまー」

返事は無いけど、極力明るく声を出した。もしもの時、声で悟られてしまわないように。

不思議な事に玄関に履物が二対。一対は兄さんのローファア。この前磨いてまだまだピカピカのまま。土ぼこりが付いていないところを見ると、グラウンドにはよらず、すぐ家に帰ってきたらしい。今日はたまたま休みだったのかな？ちよつと嬉しい。この分ならいっぱい勉強を見てもらえそうだ。嬉しさがこみ上げてきて、テンションは五割り増しだよ！

問題はもう一足。女性モノの茶色い革の編み上げブーツ。とつても足が細い人のようで、小柄な私の足の太さと大差が無い。その割には妙に長い。こんなスタイリッシュなブーツを綺麗に履きこなせ

たら、とても格好いいんだろうな。そんな風に思わせるような装備品を身に着けた人が何故うちにいるんだろ？まさか、兄さんの友達？それとも……いや、友達だよ。うん、きっとそう。友達に違いない。違和感はあるけど。

いや、友達じゃない。友達なんかよりも、もっと適合しそうな人を思い出した。

まさか、まさかまさか。そんなはずは無い。友達じゃなくてもいい。もっと親しい人でもいい。『あの人』が……？

ひたすら、理由も無く走りながら、真相を確かめようと走りながら、認めたくないって頭が勝手に否定してる。ほとんど直感で正解だと分かっているはずなのに。

リビングに入ると、すぐ近くに兄さんがいた。

私より兄さんの近くに、あの人、東雲 在達さんが悠然と絶对的な雰囲気漂わせながら立っていた。にたにたした気味の悪い笑顔と共に。

「遅かったな。チューガクセーも大変だな」

三年ぶりの声。記憶に鮮明に残ってる、鮮やかな深紅のような美声。私は正直、逃げ出したい。

でも、逃げるわけにもいかず、兄さんまで歩み寄り、ほんのちょっとだけ動けばお互いに何をしているか分かるような距離まで近づく。兄さんを心でも体でも感じられる、私の精神安定領域。

「あつはつは、変わってねーな。未だに幸紀にベツトリかよ。ん、ベツトリか、こういうときは。どっちでも同じだけどさつ。安心しろって、テメエーの兄貴をとろうなんざ、思っちゃねーから」

そう笑って兄さんをバシバシ叩く。何の作為も感じられないような笑顔と共に。

兄さんは兄さんで困ったような、それでいて懐かしいような、曖昧な顔で東雲さんの行為を甘んじて受けていた。

胸がシクシク痛む。針で刺したような嫉妬とかじゃなくて、古傷に塩を塗りこむような、そんな、痛み。

「おかえり、飛鳥」

東雲さんの暴力から解放され、近くに私がいる所為で体が動かせないのか、首だけを向けて私に言葉を放つ。その首をすぐに東雲さんに向けて、言葉を紡いだ。

「で、アリアさん。どうして今更になつて帰ってきたんです？てつきり外国に永住すると思つてたんですけど」

「今更つて手厳しい言い方すんなよ、私だつて一ヶ月で帰ってくるつもりだったし。ま、船だったから往復だけで大分時間食いそうだから、二ヶ月か三ヶ月に延ばす予定だったけどさ」

東雲さんは三年前と変わらず、自分本位に話していた。そんな東雲さんを見て、兄さんは苦笑する。私は見たこと無い、楽しそうな苦笑。

「んで、何で帰つてこなかったかつ」と、出逢い！出逢いだよ、出逢い！恋に落ちる零秒前、いや恋には落ちてねーな。とりあえず、ちつとばかり運命的な出逢いをしちゃってね。んで、三年たつちつた、てへ」

恋におちるゝ秒前とか、てへ、とか非常に年季を感じるね。それと、出逢いだけじゃ三年は経たないよ、東雲さん。

そんなことを心の中で突っ込みながら、私はより兄さんに歩み寄った。

正直なところ、私は東雲さんが嫌い。苦手じゃなくて、嫌い。綺麗な顔だつて、すらりと長い四肢だつて、明るい性格だつて好きになる要素。でも、嫌い。近くに居たくない。近くにいて欲しくない。「んじゃ、今日は挨拶だけだから。バイ」

東雲さんは言いたいことを言い尽くしたのか、兄さんから離れ、私の脇を抜けて部屋から出て行く。通り過ぎた時、聞こえるか聞こえないか分かるか小さな声で、ごめんなと呟いて。

結局、東雲さんは何をしに帰ってきたんだろ？必要な事は何も語らず、東雲さんは私たちの前から姿を消した。

しばらくの間、私はもちろん、間近に立っている兄さんも呆然と

立ち尽くしていた。

## 10x・side・O

### ・イントロダクション・

求め続ければ無くさないと、誰かに期待していた。

- 10x・七月一日(side・O) -

私、こと常陸 白音とはある人物の後を物陰と物陰とを渡り歩き、本人に見つからぬよう慎重かつ慎重に隠れながら、あとをつけて歩いた。いわゆる『尾行』をしている訳だ。人に感ずかれず、後をつけるとするのは素人对素人では追跡する側が圧倒的不利だ。何故ならば……と、危うく脳内で無駄な論議を己対己で交わし始めそうだった。今は専念すべき事に専念すべきだ。

現状における追跡される側の人間、被追跡対象は言わずもがな、睦月 飛鳥。私の数少ない友と呼べるクラスメイトの後を、失礼千万にも無許可に追跡していた。私と同じように尾行をしているのは、勿論の如く青海 麟。彼女が尾行しようと言い出した張本人な訳だが、だからといってそれを現在行っている所業の免罪符にするつもりは無い。私も人のことが言えないし、な。

商店街で別れてすぐ、私と麟は気づかれぬように踵を返し、飛鳥の後ろにつけた。遠すぎず近すぎず、我ながらベストなポジションをしたと思う。麟が近づきたそうにうずうず体を揺らしていたので、独走しないようにさり気無く鞆を掴んで、行動を制御。まさに手綱だ。動物的なところを持ち合わせる麟には実にシックリくる。どうやら歩いて帰宅するらしく、バス停の方角には向かわなかった。ここから近いのだろうか？いや、それは短絡過ぎる考え方だ。金銭、時間、体力等、歩く理由は距離以外、挙げようと思えばいく

らでもある。

若干前に出すぎている鱗を引っ張りつつ、なるべく自然に観察する。と、唐突に、

「ふふっ……」

飛鳥が含んだような笑いをした。友達をこんな風に言うのは忍びないが、正直に言おう、思いつきり変態だ。今度見かけたら注意しておこう。

鱗が隣できもっ！こわっ！と言っているのを聞かないことにしておきつつ、尾行を続行。

「はあ……」

今度はため息。なんとも感情起伏の激しい子だ。もっとも、私たちの前ではなだめ役に回っている所為であまり感情を見せる事は無いが。今度は私がなだめ訳にまわり、鱗と飛鳥をぶつけてみるのも良し、か。

それからは特に何事も無く、ゆったりとしたペースで歩く。あまり劇的なことは期待していなかったが、こうも何も無いと肩透かしを食らったような、物足りないような、とりあえず不満だ。

若干の哀愁を漂わせつつ、鞆から鍵を取り出し、戸をあけた。愛しの兄君がいる割には随分と暗い。

……もしかしたら、飛鳥は兄が嫌いなものかもしれない。私たちに心配とかをかけないように、兄好きを演じていたのか？いや、それはいくらなんでも考えすぎだ。いやいや、飛鳥なら変なところに気を回すからありえる。

だからといって、どうやって真相を確かめる？本人に聞けるはずも無く、私が思考の沼に陥ろうとしていた時、鱗から声が掛かった。「んで、この後どうするよ？ん？とりあえず、お兄さんに突撃かますか？」

怪しい笑み、怪しい眼光、怪しいポーズ。変態め。

「突撃するのは構わんが、屍は拾わんぞ」

「死ぬの確定！？」

「どう考えても」

「酷っ！私が前衛、お前が後衛、これでOKのはずだろ！？背中  
任せたぜ！」

「ああ、ばつちり背中から切り捨ててやる」

「裏切んの！？」

「どう考えても」

「そこは考え直そうぜえ」

「無理だな」

寸劇コントはこれぐらいにしておいて、早々に立ち去るか。あま  
り長く居過ぎて見つかったら、後々取り繕うのが面倒だ。

それにしても、飛鳥の兄に直接突撃か、良い策かもしれない。日  
を改めて実行も考えておこう。目的は勿論、睦月家長男の人格判別  
だ。

Uターンするのも変だと思い、そのまま睦月家を通り過ぎる形で、  
家に帰ることにしよう。ほんの少しかり遠回りになるが、致し方  
あるまい。

「さ、帰るか」

「合点承知の助」

奇怪とか古いというのは言わないでおこう、可哀想だ。清々しい  
までの麟の笑顔が。

睦月家を通り過ぎ、閑静な住宅街の更に奥のほうに行く途中、

「ふふ」

妙に上機嫌に追い抜いていく、女性が目に留まった。狂ったよう  
に美しい、女性。

麟は興味なさげ、いや、大音量の鼻歌を奏でていたから気づかな  
かっただけか。

どちらだつて構わない、私はいつ頃睦月家に突撃するか黙考しつ  
つ、帰宅した。

- 20x・七月四日（side・O） -

先日の尾行から三日目、七月最初の日曜日となった。前々からおぼろ気ながら模索していた計画——引つ張る必要もないので明かすが、飛鳥の兄君に接触を試みてみようというもの——を実行する日に今日と私こと、常陸 白音は決めていた。不本意ながら相方たる麟も合意の上だ。

とにもかくにも、私は睦月邸付近の角に意味もなく隠れているわけなのだが……

「なあなあ」

「どうした、麟？」

「いつになったら入ってくんだ？」

「さあな」

どうしてか立ち往生していた。いや、理由ははっきりとしているのだから、どうしてかと理由に疑問を抱くのは正しくない。私達はアポイントメントも無しに、知り合い不在と知りながらその知り合いの家に突入しようとしているのだから、尻込みするのも当然といえよう。

それは麟も同じようで、尻込みしていても早く行けなどと突っ込んでほこなかつた。私達と話しているいつもの調子で先行してくれればよいものを……。大事なところで人見知りな奴だ、まったく。

突入を先伸ばしにするために、意識的か無意識的かは計り知れないが、麟が話しかけてきた。

「にしても、どんな奴なんだろう？飛鳥の兄貴って」

「あそこまで飛鳥が自慢しているんだ。少なくとも悪人ではないだろうし、勉強面もかなりのものだろう」

「もしかしたら勉強ができるだけの変人かもしれないぜえ？」

「ああ、人格面は飛鳥の見栄と言う可能性は捨てきれないな……」

麟が軽く不敵に笑いを浮かべ、私は軽く考え込む。残念なことに私達二人は少子化社会の申し子、一人っ子なので兄弟姉妹間で普通、どのような関係が成立するかはよく分からなかった。仲がよければ自慢をしい、仲が悪ければ貶しあうような単純でなものではないことぐらいはわかるが。

「いや、きつとそうだね！絶対そうだね！毎日テレビの前でグヘグヘ笑ってるに決まってるね！」

決まっているらしかった。麟は見もせぬ飛鳥の兄君に恨みでもあるのだろうか？

「何か根拠でもあるのかな？」

私が半ば呆れ気味に、片目をつむって横目で言うと、麟の口から本音が漏れた。

「勉強できる奴なんてみんな変人で敵だ、コンチクショー！」

「それは私は変人か、はたまた勉強が出来ないということか？」

真人間で、人並み以上には勉強ができる自負があったので、攻撃に打って出てみた。

すると、人間の意思とは弱いと思わせてくれる愉快的反応が返ってきた。

「ま、まあ、冗談だ！」

ふっ、他愛もない。

「よし、冗談でついたその勢いで睦月邸に突入してくるといい」

「よし、行くぞ！ついて来い！」

「一人で行くに決まっているだろう？」

「待てや、コラア！」

それからどちらが先に行くかという不毛かつ無意味な争いが十分ほど続いた。結局は二人とも家の中に入るのだから、当たり前と言えはまったくもってその通りなのだが。人間、保身がかかると単純な物事が分からなくなるものと弁解させてもらつえると有りがた

い。

十分も経てばお互いそのことに気付き、当然の既決として二人で行くことになるのは、言うまでもない。

—●—

震える指で睦月邸のチャイムをならす。私の予想に反して間の抜けたピンポンという音も、事務的なブーという音もせず、小さな鐘でも叩いたかのようなカランと優しい音になった。続いて、タタタと軽く、小走りをする足音が近づいてきた。飛鳥の兄君と思って間違いないだろう。確か、兄妹二人暮らしという現状のはずだ。今は日曜日の午前中、来客は無いであろうし、そもそも客人に客人の対応はさせないだろう。

カチャリと、蝶番が外れる音の後、ゆっくりと向こう側から開かれる。ゆっくりなのは私の体感であって、扉の向こう側の飛鳥の兄君がそんな焦らすような演出をするはずはない。

「どちらさまですか？」

背の高い男性だった。中学生である私が言うのも何だが、若干幼さの残る顔つき。爽やかな雰囲気の好青年というのが私の第一印象であった。少なくとも、この人に対して悪いイメージを抱く人は人格がひねくれていない限り、誰も居はしないだろう。

正直なところ、思っていた人物像よりは遥かに、一回りも二回りも良い人だ。外見だけの話ではあるが。あと声も、主観ではあるが中々に……。

いつまでも外見ばかりを見てあるわけにはいかず、私は震える声で彼に対応した。

「あ、あの、私達は飛鳥さんの友達で、会いに来たんですけど……」  
らしくもなく緊張して尻搾まりな発言。高校生の男性と話しているのだから仕方ないであろうと理解してほしい。

私のまごついた聞き取りづらい言葉から、彼は正確に聞き取り、

丁寧に対応してくれた。

「せっかく来てもらったのに悪いんだけど、飛鳥は今外出して……ごめんね」

「い、いえ……」

知っていることを改めて言われたからといって顔には出さない。出す出さないと言う余裕そのものが無かったというのが悲しくはあるが。

「うーん、昼食はいるって言ってたから、午前中には帰ってくると思うんだけど……中に入って待つてる？」

「ご、ご迷惑でなければ……」

兄君と会話する良い機会になると思ったので、言われるがままに家の中へ。こんなにも緊張している心境で会話が成立するかは疑問であったが。

ちらりと横目で麟を見てみる。やはりと言うかなんと言うか、完全に硬直。以外に思うかもしれないが、麟という女の子は男性らしい格好良さを持ち合わせた人間にかなり弱い。彼みたいな人間はダイレクトに麟の弱点。右手右足が同時に動いているくらいだ、会話の参加は当てにならないだろう。さっきの兄君への貶し文句は何処へいったのやら。

飛鳥の部屋ではなくリビングに通されて四人掛けのテーブルに麟とならんで座る。

座ったのを確認してからか、飛鳥の兄君は私達に問いかけてきた。

「飲み物だけど紅茶でいいかな？」

私は浅く一度うなずきながら、はい、と答え、麟はカクカクと早送りした張り子の虎のように、素早く五度頷いた。紅茶なんて一度もないくせに、断れなかったらしい。

飛鳥の兄君はリビングから見える位置にあるキッチンに入ると、手元を見なくても分かるくらいに手早く、紅茶の準備をしていく。一目で普段からしており、慣れていることが分かった。

ようやく落ち着いて飛鳥の兄君の観察を始めた頃、麟が興奮さめ

きらぬ様子で私に話しかけてきた。もちろんのこと、飛鳥の兄君へ聞こえぬように小声ではあったが。

「何か飛鳥の兄貴って、歯がキラーンって、髪がサラって、ナァ！？ウツハ！」

「いいから落ち着け、馬鹿者」

「なっ……！」

んだと、この！とでも続けたかったのかも知れなかったが、なんと良いタイミングで、紅茶を淹れた装飾の細かい陶器のカップをのせた洒落たトレーを持って、私と麟の視界に入ってきた。

硬直した麟には申し訳ないが、その姿を見て私は緊張が大分ほぐれた。

「会話の邪魔をしちゃったかな？」

そう言って、高価そうな、いや、間違いなく高価なティーカップを私達の前に一つずつおく。二つだけカップをおいて、トレーを脇にかかえる。

考えても見れば当然の事で、妹の友人と席を共にするような兄は少ないだろう。彼のような出来た兄であればなおのことだ。

しかしながら、ここで兄君に部屋にでも下がられてしまえば、来た意味そのものがなくなってしまう。何か良い話題は……。

「あ、あの！」

またもや意外、私より先に引き留めたのは麟だった。しかしそれは勢いだけの模様、すぐに失速した。

「えっと、その……」

麟がアタフタと右へ左へ上へ下へと視線を彷徨わせて、赤くなっていく。せっかく麟が稼いでくれた時間だ。助け船も兼ねて、有効に使わせてもらうことにしよう。

「あの……飛鳥さんは家ではどんな感じなんですか？」

取り敢えず、両者共通の知人である飛鳥のことを出してみる。引き留めて喋るようなことではないが、それくらいしか私には話題が思い付かなかった。

兄君の方も飛鳥の話題なら喋ることが可能だし、必要十分な話題といえよう。

「家での飛鳥か……。うーん、一言で言えば甘えたがりだね。妹に甘えられるなら兄としてはいいことなんだと思うけど、そろそろ自立した方がいい年頃なんだけど」

兄君はトレーを持ったまま振り替えて、苦笑と共にそう答えた。そんな何気ない仕草さえ、彼がすれば絵になる。

「逆に聞いてみたいんだけど……。学校で飛鳥はうまくやっているかな？」

「はい」

私は迷いなく答えた。事実であつたし、何より兄君の手前、些細な問題点を列挙するわけにもいかないので、必然とも言える回答だ。それを聞いて彼はゆっくりと自然な微笑みを作り、そっか、と年相応な軽さで反応する。そして付け加えるように、

「これからも飛鳥をよろしくね。変わりって言うのもなんだけど、もしも何かあつたら相談くらいには乗るよ」

と冗談めかして言った。

何と言うか……。本当にこの人は、自然体なのがいい人だ。言い方が悪いが、飛鳥には勿体無い程に。

だから私はあくまで努力して自然体になるという矛盾した行動で、ありがとうございます、と小さく小さく言った。

そんな反応を見ても、飛鳥の兄君は微笑んだまま、口から笑い声と共に言葉を放つ。

「そういえば、自己紹介もしてなかったね。知ってるかもしれないけど、飛鳥の兄の睦月 幸紀っていうんだ。よろしくね」

「私は常陸 白音、こちらに座っているのは青海 麟です。以後、よろしくおねがいします」

私は深々と一礼し、麟もぎこちない動作でそれに習う。

礼までしたのはやりすぎだろうか？私がそう思っていると、案の定、飛鳥の兄君——幸紀さんは慌てた様子で頭をあげてくださいと

と言ってきた。妹との友達にそんなことをされれば当然なのかも知れないが。

自己紹介もし終わり、それから三十分程度三人で有意義な雑談をした。有意義な雑談とは矛盾した言い回しな気もするが、一番良い言い方な気がする。

飛鳥のことをはじめ、年齢、趣味、学校、出身中学、等々実に多岐に渡る話をした。

そんな話せば話すほど、幸紀さんの正確の良さ、いや、私の好みとの適合度にはまっていく。溺れていく。

とは言え、話題は有限、時間も有限。当然、飛鳥が帰ってくる。早かった、本当に時間が過ぎるのが早かった。今思えば、なぜ早く睦月邸に入らなかったのかばかりが、悔やまれる。

まあ、その悔やみを解消してくれるほどに、飛鳥の驚き様は滑稽だった。

「ただいまー……って、なんで二人がここに居るのよ!？」

新人芸人顔負けの全身を使ったりアクションをしてくれた。

飛鳥も帰ってきたのなら、流石にこの場にずっと引き留めておくわけにもいかず、幸紀さんは自室へと下がっていった。

こういう場合、私達が飛鳥の部屋に行くのが普通だと思っただし、飛鳥もそうすると申し出たのだが、幸紀さんが飛鳥に近づいて二言三言囁くと、飛鳥は顔を真っ赤にしてうつ向き、兄君の指示に従った。

幸紀さんがいなくなると、麟も調子を取り戻し、飛鳥もテーブルについて、話を始める。兄君の話題がある分、いつも以上に会話がはずむ。

そんな中、私は——幸紀さんのことを一人、黙々と悶々と、考える。よもや、私がこのようなことで頭を悩ます日が来るとは思ってもなかった。

打ち明けよう。

認めよう。

私、常陸 白音は友人の兄君である睦月 幸紀さんに――

《初恋》

――をしました。

## 201・side・B

### ・イントロダクション・

楽しくなくても心に黙って笑えるし、哀しくなくても心に黙って泣けるけど、好きでもないのに俺は誰も愛せない。

### ・七月七日(201・side・B)・

七夕。

本日は間違いなく織姫と彦星が天の川の岸边で一年に一度出会う、七夕と一般的には呼ばれる日だった。

カレンダーを見ても時報を聞いても、何をしたところで今日が七夕であることに変わりはない。何処かの自由奔放、自由気ままな彼女のようには日本を出ない限りは。

しかしながら、高校生ともなれば七月七日なんて、昨日が七月六日水曜日で、明日が七月八日金曜日で、ついでに言うなら今日は木曜日であるくらいの意味しか持っていないわけである。

と言うわけで、今日も昨日と同じように平日として日本社会は廻るわけで、きつと明日もそれは変わらない。

つまり、何が言いたいかといえ、どんなに言い訳したところで世界は俺一人を待って立ち止まるなんて、優しさは孕んでおらず、俺の意思に無関係に動き続ける。要は俺は今日――

「学校、行かなきゃな……」

理由もなく、学校をサボタージユしたい気分には駆られていた。

行けば、何かありそうな……漠然とした不安。何となく、形容しがたい胸のわだかまり――いわゆる、虫の知らせというやつ。

でも、結局のところ、俺なんかに学校をサボる勇気なんてなく、

いつもの時間にサッカー部の早朝練習に出ていた。

練習をしていても、チームメイトと話していても、この胸の重さは消えず、嫌な予感が俺の頭を満たしていた。

そういえば、飛鳥の様子がおかしかった気がする。体調が悪いといった感じではなく、精神的なストレスがたまっている雰囲気。

もしかしたら、それが原因なのかもしれない。いや、きっとそうに違いない。自分で言うのもなんだが、俺は少し飛鳥に対して過保護すぎる嫌いがあるし、父さんや母さんが家をあけるようになって、それはより顕著になった。

俺はそんな言い訳じみた、言い逃れじみた後付けの理由を噛み砕き、嚥下して、不安という小さな小さなわだかまりをねじ伏せた。ねじ伏せる必要もないのに、ねじ伏せた。

そうこうしている内に朝練は終了。全く充実感は無かった。疲労も感じない。やっている間の記憶さえも曖昧模糊。

そんなことはお構い無しに、やっぱり朝練の後には一時間目があるわけで、授業をうけるのには制服に着替えなければならない。

はあ……、と思わずため息を漏らす。いつから俺はこんなにも哲学じみたというか、ニヒルな思考回路になったのだろう？なんの得もないのに。なんの意味もないのに。

両頬を叩いて、いつもの思考を動かす。クラスメートと一緒に授業を受けて、放課後にはサッカー、合間合間に綴木と馬鹿みたいに会話する。なんのことはない、楽しい楽しい慈しむべき日常だ。

「よし！」

授業教材で膨れたショルダーバックを肩に掛け、半ば自動的に済ませた着替えに何処かおかしいところはないかと軽く見る。変な箇所は見当たらなかったもので、荷物がロッカーの中に収まっていることを確認してから、ロッカーの戸を閉めた。

ずれてきたショルダーバックをもう一度掛け直し、一番最後に更衣室を出る。しっかり扉を閉めて、鍵を掛け、ふりかえる。振り返れば――

「やつほー」

「うわ！」

言い訳無用至近距離に、綴木が立っていた。その所為で俺は若干、驚きの声をあげる。対する綴木はといえば、怖いくらいにニコニコ笑っていた。本当に怖いくらい。いや、マジで怖いんデスケド……。「ど、どうした……？」

やっとのことで絞り出した言葉が終わるか終わらないかのうちに、綴木は返答を始める。

「どーしたも、こーしたもないよ！昨日のこと忘れたの？うー……」  
頬を膨らませて、綴木は上目使いに唸る。傍目からみれば可愛い限りだった。

「昨日のこと？」

しかしながら、俺にはこんな風に一方的に責められるような理由は思い付かなかった。少なくとも昨日、七月六日に関しては。昨日に限らずとも責められるような行動をとった覚えはない。

「忘れるなんてさらに酷いね！」

遂には綴木はそっぽを向いてしまった。本当に思い当たる節のない俺にとっては、リアクションが非常に取りづらい対応だ。

まあ、向こうを向いてしまわれたのならそれはそれで俺はやれることがある。

「じゃ、そういうことで」

俺にできることは二人とも授業に遅れないようにスルーして、教室に向かうことだけだった。

「ちょ、ちよつと待ってよー！」

俺が歩き出したの背中越しに感じとったのか、綴木は早々に態度を変え、俺の後ろからついてきた。

軽い足音が俺より少し早いテンポでついてくる。無言のままで、二人並んでグラウンドを抜け、玄関で靴を履き替え、廊下を歩いて教室に入る。クラスメートに冷やかされつつも、席について授業の準備をして開始を待つ。

今日もいつもと変わらない、日常が始まる。不安はいつの間にか、心の奥底に沈んでいた。

\* \* \*

「と言うわけで昼休みー」

「綴木、一体誰に話しかけてんだ？」

「もちろん、幸紀くん」

「あつそ……」

午前中の授業を難なく消化して、一時のブレイクタイム。またはランチタイムとも言う。まあ、横文字でいくら表現したところでやることは何一つ変わらず、持参した弁当ないし学校内で購入した昼食を食べるのが主なことである。余った時間は午後の授業に備えて準備をするなり、やってこなかった宿題を涙を流しながら写すなり、友人達と会話をして友情を育むなりしていい、学生達に与えられた憩いの時間の一つである。

そう、俺の中では憩いの時間と定義されてるんだよな。なのに何故だろう、こんなに荒んだ気分になるのは。

「そんなの弁当忘れたからに決まってるだろ……」

自答してみた。虚しくなるだけだった。おかしいな、ちゃんと入れた記憶はあるのだが。ボケたか、この年で。

ため息をついたところで腹はふくれないので、昼飯をどうするか早いところ決めないと昼休みが終わってしまう。とはいっても、財布をわざわざ毎日学校に持つてくる必要のない俺にはお金もない。自力ではどうすることもできないのは分かっている。流石に食事をぬいては午後の授業は耐えられても、部活は無理だ。

仕方ないと思い、綴木に金をほんの少しばかり貸してもらおうと、横向きに見上げる。

そこには満面の笑みを浮かべた綴木が待ち構えるように一言も言葉を発さずに立っていた。うわぁ、こいつ明らかに俺が困っている

のを知っていて、頼ってくるの待ってるよ。進んで助けようと言う  
イカした心意気は無いのだろうか。

「なあ、綴——」

「そうだよな！仕方ないから弁当を忘れた幸紀くんに私のお弁当を  
あげるよ！いや、うん、全然気にしないで！私はもう一個お弁当あ  
るから！」

と、早口に、まるで用意しておいた台詞を暗唱するかのように言  
った。

まあ、俺としてはありがたい限りだ。なぜ弁当が二つあるのかと  
か、いろいろいるツツコミどころ満載なセリフではあるが、昼食を  
食い損ねると言う危機からは脱却したし、下手なことは言うまい。  
慎んでいただくとしよう。

「悪い、本当に助かる」

「私と幸紀くんのラブラブな仲じゃない！私ねお手製だから、美  
味しく食べてくれたらそれで良いよ。それより、屋上で一緒に食べ  
よう！」

「あ、ああ……」

かなりハイになっている綴木に強引に引っ張られて俺は、クラス  
メートの大半の視線を集めながら教室を出ていった。

そんな心地よい恥ずかしさのなか、俺は朝からあった不安は心に  
溶けて消えていた。溶けている不安なんて少し暖めれば、沈殿して  
重くのしかかるというのに、そんなことは忘れて、ただこの時を、  
楽しい一時を堪能する。

・イントロダクション・

あなたは今までどこでなにをしていますか？

・七月五日（201・side・S）・

今は月曜日の昼休み。昨日以来、白音ちゃんの様子がおかしい。何処か上の空というか、思い悩んでいるというか、心此処に在らずというか。そのくせ、私が話しかけるとやけにどもる。普段どもることなんて滅多にない白音ちゃんが、だ。

友達として何があつたか知りたいし、悩んでいるようなら相談にのつてあげたい。

「ねえ、白音ちゃん」

反応がまったくない。呆けたまま、廊下の方を焦点のあつてない目で見ている。そして時折、思い出したように溜め息を吐く。相当深く考え込んでいるらしい。

「ねえ、白音ちゃん」

「な、なんだ？飛鳥」

「お箸が止まつてるから、どうしたのになって？」

「いや……何でもない」

白音ちゃんにはばつが悪そうに目を伏せた。再度、箸を動かす気配はない。本当に大丈夫だろうか？何でもないと言われた以上、私が深く聞くことは躊躇われた。

隣ちゃんもそんな白音ちゃんを怪訝そうに見ている。

「悪い、少し用事がある」

短くそれだけ言つと、ほとんど手を付けていないお弁当箱を片付

けて、鞆の中にしまうと、教室から出ていってしまった。

体調が悪いと言う感じはなかったから大丈夫だと思うけど、悩んでいるならやっぱり相談にのってあげたい。友人として。

「麟ちゃん、白音ちゃん大丈夫かな？」

「大丈夫じゃね？別に職員室とかに呼び出された訳じゃないんだろ？」

「え、あ、うん。そだね」

麟ちゃんは白音ちゃんのことなど微塵も気にせず、最初から少なかったお弁当の残りをかきこんだ。心配しているそぶりを見せないだけか、単に興味がないだけか分からなかったから、誤解を訂正することはなかった。

やはり、白音ちゃんと直接話してみるしかないんだろうか？

私はそう考えていたのだけれど、その日、白音ちゃんは昼休みが終わるギリギリまで、教室に帰って来ることはなかった。

放課後もそれは同じで、短く言葉を交わすのみ。白音ちゃんは私たちを避けるように、そそくさと帰ってしまった。

- 七月六日 (201・side・S) -

翌日、白音ちゃんは目の下に大きく濃い隈を作って学校に現れた。それでも眠たい様子は見せずに、しっかりと寝ずに授業を受けている。

ただ、白音ちゃんは授業中に集中力が散漫になりがちなようで、先生にしかられる場面が何度あった。品行方正かつ真面目で通っている白音ちゃんには珍しいことだ。

心配になって声をかけようとしても、休憩時間には逃げるように教室を出ていってしまうので、話のしようがなかった。

これは、相当深く悩んでいるかもしれない。

兄さんに相談して、何かアドバイスをもらってから話しかけてみようかな？

そういえば、白音ちゃんの様子が変わったのは日曜日からだ。初めて白音ちゃんと麟ちゃんが家に来て、兄さんに会った。

……まさかね。白音ちゃん、そういうこと苦手というか、興味無さげだし。

きつと白音ちゃんのことだ、哲学じみたすごいことを考えているに違いない。

午前中の授業が一段落し、昼休憩。白音ちゃんは昨日のように教室から出ていってしまったかと思ったけれど、いつものように三人集まって食事をする事になった。

「昨日の用事ってやつだけどさー」

ご飯を口に放り込みながら、麟ちゃんが白音ちゃんに軽い口調で言う。

「何さ？何なのさ？ん？んんー？言ってみ？ほれ、言ってみ？」

訂正、興味津々、心底楽しそうな口調で言った。

「少し図書室に調べ物さ」

「異議ありっ！っーか、嘘だっ！」

ビシッとどこぞの裁判のように言い、指の代わりに箸で白音ちゃんを指す。口元にお米がついていて、しまりが無い辺り麟ちゃんらしい。

一応、行儀が悪いと注意しようかと思ったけど、白音ちゃんが昨日何をしていたか、私も気になったので水を差すのはやめておいた。「ほう……その根拠は何かな？」

こういう駆け引きに慣れているのか、言い淀みなく白音ちゃんは麟ちゃんに応答した。

絵にすると熱血新米刑事と巧妙狡猾な犯人。物語的には新米さんが勝つけれど、実際のところ、勝つのは犯人っぽい。

「ふふん、あたしの情報網をなめてもらっては困るよ、マイフレンド。君が屋上に上がっていき、一人で思い悩みながら溜め息を吐いている。その顔はまさに恋する乙女の表情だった——という証言が届いているんだ。あたしの目は誤魔化しきれなかったようだなっ！」

下手に演技がかった大袈裟な動作で白音ちゃんを追い詰めていく。悲しいかな、白音ちゃんにはまったく追い詰められている気配がない。

「っていうか、あたしの目って言うてるけど、証言ってことは、麟ちゃん自身何も見てないんじゃない……？」

「細かいことは気にしないっ！」

腕を繰んで目を光らせ、麟ちゃんが吠えた。

熱くなっている麟ちゃんとは裏腹に、白音ちゃんは冷静に切り返す。

「Elementary, my dear RIN. その証言者とやらがちよつとした勘違いをしているだけだ。確かにいたし、図書室にいたという嘘を吐いたのは詫びよう。だが、その恋する乙女というやつは違うな。考えても見るんだ。そんな感覚的な表現、人によつて大いに差が出るものだろう？」

「うう……屋上で勘違いされるようなことしたんだろ？ あんなことや、こんなこと……うっは、そんなことまでっ！」

若干暴走し気味な麟ちゃんを尻目に、あくまでペースを乱さない白音ちゃん。

「日本では基本的、疑わしきは罰せず、つまりこれ以上、説明は不要なんだが……麟の場合、疑う前に罰しそうだ。罰せられる前に説明しておこう」

一息ついてから、白音ちゃんは顎に手を当てて腕をくみ、探偵っぽく話出す。

「きっとその証言者とやらの勘違いはこうだろうな。恋をすれば誰でも思い悩む。そんな固定概念じみたものが、逆転されてインプットされていたんだろう。思い悩んでいれば恋をしている、と言う具合にな。まったく迷惑な話だ。勝手すぎる。もしやその証言者とやらは私に気でもあるのかな？ ふ、冗談さ。相手に気があったとしても、私にはないしな。この際だ、これ以上憶測が飛び交わないために、思い悩んでいた内容も一応言っておこうか。実は……ダイエツ

トだ。恥ずかしながら最近、お腹周りが気になり始めてね、一念発起、始めたのさ。そのことを屋上で悩んでいる辺り、乙女といえバ乙女だろうが」

最後に一つ、含みのある笑顔をくれて、白音ちゃんは話を終えた。やはり白音ちゃんは白音ちゃん。色恋沙汰とは無縁らしかった。

ダイエットが悩みの種だとは思わなかったけど。

そういえば、私も最近お腹周りが……。

「ぐわあー！なんか納得いかねー！」

隣ちゃんが一人、不満を叫んでいた。

\* \* \*

白音ちゃんの悩みが原因の集中力散漫になった行動は昼休憩までだったようで、今日は三人して寄り道。

頃合いを見計らって、それぞれ家へ。今日はバスで帰ることにした。車内でうつかり寝そうになったが、なんとか無事、家に到着。

私が家に帰ったときには、まだ兄さんは帰ってきていなかった。

まだ部活をしているんだろう。いつものことだ。それまではちゃんと勉強していよう、一緒の学校に行くために。

勉強を始めて間もなく、兄さんが帰ってきた。今日はいつもより早く終わっただけらしい。玄関まで迎えに行こうかと思っただけ、するまでもなく兄さんの方から部屋に顔を出してくれた。

「ただいま。勉強、分らないとこないか？」

「おかえり。今のところ大丈夫だよ」

「そっか。ご飯出来たら呼ぶから、それまで頑張れ」

「うん、ありがと、兄さん」

会話はそれだけで終わり、兄さんは下に降りていった。本当はもう少し話していたかったけど、そういうわけにも行かなかったから、もう一度、勉強にとりかかる。

それから5分ほど経って、不意に携帯電話が鳴りだした。メール

だ。サブディスプレイを見てみると『白音ちゃん』の文字。

白音ちゃんからメールをしてくるなんて珍しい。急ぎの用事だろうか？

メールを開いてみると、短く内容が書いてあった。

『夜分に突然で悪い。原公園まで来てくれないか？』

原公園というのは私の家の近くにある小さな公園。白音ちゃんが来てほしいと言うからには、重要な内容だろう。しかも、こんな時間なら尚更に。

私はリビングまで行き、兄さんに外へ出ることを告げる。兄さんは最初、渋い顔をしたが、相手が白音ちゃんだと言うと快く許可を出してくれた。

送ろうか、という兄さんの甘い申し出を、夕飯の準備を理由に断った。

なるべく速く行つて、早く帰つてこようと思い、ほんの少し歩を速める。

2分とかからず、公園についた。

白音ちゃんは公園の真ん中で、電灯の明かりに照らされながらたっていた。私が白音ちゃんを見つけたように、白音ちゃんもすぐ私を見つけたようだ。

「やあ、飛鳥。悪いな、こんな時間に」

片手をあげ、軽く挨拶をしてきた。白音ちゃんは制服のままだ。どうやらまだ、家に帰つてないらしい。

「いいよ、ウチのすぐ近くだし」

白音ちゃんの誘いで二人してベンチに座る。僅かに時間をおいて時間を置いて、迷いなく話始めた。

「いきなりぶしつけな質問で悪いんだが……飛鳥は自分の兄が好きか？」

「うえ！？あ、うん……好き、だけど……」

突飛な質問に素頓狂な声をあげてしまった。

「はは、そんな驚くことではないだろう？普段の言動からみれば、

飛鳥がブラコンなのは分かりやすすぎる。暮らすの人間で知らない人間がないほどの周知の事実だ」

「そ、そんなに？」

隠すつもりはなかったけど、そこまで知られていたとは思わなかった。

「飛鳥……その好きは妹が兄に対しての『好き』か？それとも、女が男に対しての『好き』か？」

「白音ちゃん、いきなり——」

「頼む、真面目に答えてくれ」

白音ちゃんの顔はとても真剣だった。私に答え以外のことを喋らせないほどに。

「私は兄さんが……妹として、好き、だと思うけど……よく、わかんないかな……」

真剣な白音ちゃんを前にして、私は嘘も建前もなく、本心でもないうような、そんな答え方をした。白音ちゃんは一体、何を思って私にこんなことを聞くんだろう？

白音ちゃんは急に張り詰めた空気をといて、息を吐いた。

「すまない。もう少しソフトに聞くつもりだったんだが」

「別にいいよ。気にしてない」

いきなり夜に呼び出されて、こんなことを答えさせられたから、内心ドキドキだったけど。

「でも、どうしたの？白音ちゃんらしくないね」

「いや、実はな……」

さっきまで引き締まっていた顔が、一瞬困惑に歪んで視線が外れた。でも、すぐに元に戻った。

「私は、その、初恋という奴をしてな」

「ええっ！？つと、ごめん……」

「いや、その反応はもつともだ。私だからな。それで飛鳥に色々聞きたいと思って、思い立ったが吉日、連絡を入れたんだ」

麟ちゃんの目は、実際のところんでもなく鋭かったらしい。

「その……私でよかつたら、何でも相談にのるよ」

「相談じゃない。悩んで成就するまでが一番楽しいと聞くし、そこは一人で思い悩むことにするよ。飛鳥に聞きたいことは一つだけだ」

「一つだけ？」

「ああ、一つだけ、だ」

白音ちゃんは確認するように、繰り返した。嫌な予感がした。

「飛鳥が本気で好きと言えば聞くつもりはなかったが」

理由をつけて断れば良かった。

「幸紀さんに、恋人はいるのかな？」

白音ちゃんのたった一つの質問に、私は答えられなかった。

・七月七日(201・side・B)・

昼休みが終って五時間目。いろいろ悶着はあったが(強制的に弁当が入れ替えられたり)、とりあえず五時間目。

五時間目は、魔術技術の授業。毎日ある授業だったが、今日は特別だった。

実習授業。

一年生から通して初めて、魔術の実践になる。今までされなかった理由は簡単で、単に危険だからだ。魔術式の組み立て失敗は、命に関わる。

だから今までずっと、座学による理論勉強に留まっていた。それがようやく今日、次のステップへと進めるのだ。周りのクラスメイトの中にちらほら、目に見えて浮き足立っている奴が居る。

そんな中、俺は一人、不安に苛まれていた。どうしようもなく、見えない不安。

綴木との会話で沈んだはずの不安が、俺の中にまた現れていた。何も無ければ良いけど。

俺一人程度の不安で授業がとまるはずも無く、滞りなく進んでいく。先生はこと細かく注意を白板に書き連ね、事務的に解説していく。

その説明を聞き漏らさないように、必死に耳を傾けた。聞いていないと不安が的中しそうだったから。

やる内容としては簡単なものだった。一年生初期にならった理論で、物体の造型変化行う。

十人のクラスメイトが二人ずつのペアになって、実技を行う。何の因果か、俺のペアは綴木だった。クラスの奴ら……何かした

だろ。

全員が同時に魔術を行うと、先生が監督しきれないので、一組ずつ行つ。俺と綴木は三番目だった。

今日は二時間連続して、魔術の授業だ。残り時間から考えると、俺らは二時間目になるだろう。

初めのペアが準備を始めるのと同時に、綴木が近くに寄ってきた。皆、緊張し始めている中、綴木はいつものように笑っている。

「うわー、桧野君、ガッチガチだねー」

桧野君とは、今前に出て行き、一生懸命に魔術式を書いているクラスメイトだ。気弱だが、真面目な性格の桧野君は、手に汗を欠きながら、間違えないよう慎重に頑張っている。

そんな桧野君とペアになっているのは七城。ろくに作業もせず、指示ばかり出している。

教員から見れば評価が低そうだが、実際七城が桧野君に指示を出していないと、桧野君は上がってしまい、上手く魔術式を書くことが出来ないだろう。

「でき……ました」

「ふう……」

十分ほど経って、魔術式は完成した。

これから始まる魔術に、固唾を飲んで、これから先、起こることを見守るクラスメイト一同。

教室に緊張の意図が張り詰めていく。

与えられた課題は簡単なものだ。直方体に固められた粘土を、球体に変えるのみ。

先生から直方体の粘土が二人に手渡され、二人はそれを魔術式を中心に置く。

後は自動的だった。回路が重い音を上げながら稼動し、粘土が奇妙な動きを始める。

ちゃんと魔術式は動いているようだ。最初の段階は成功らしかった。

「上手くいつてるみたいだね」

「あ、ああ」

耳元で、綴木が囁く。

驚いて声をあげそうになったが、何とか踏みとどまって、小さい声で返した。

そんな俺の様子が面白かったのか、くすりと笑って、小さい頭を俺の肩に乗せてきた。

クラスの皆は前に注目しているので、こちらを気にしている人はいない。でも、恥ずかしいものは恥ずかしい。

しかしながら、力ずくで払いのけるわけにもいかず、どうしようか困っている内に桧野君と七城の魔術が終了する。それと同時に、

綴木は俺から離れた。綴木に遊ばれた、か。

桧野君たちが作り上げたのは、歪にゆがんだ球体だった。

理論としては単純なはずなのに、上手くいかない。これが魔術の難しさ。

七城は溜息を一つついただけで無言のまま、席に戻る。

それに続くようにして、桧野君はうつむいて、席についた。

先生は一言も、彼らに声をかけることなく、魔術式が書き記された紙を片付けながら、次の組を呼んだ。

「うーし、やるかー!」

えらく気合の入った声。日々屋だ。クラスーのお調子者。そして、自信家。付け加えて、自覚無しのうちかり者。

「くう——っ!」

伸びをしながら、欠伸をかみ殺し、いかにもやる気なさげに出て来たのは枕崎。名は体をあらわすのを体現しているような奴だ。

やる気最高値と、やる気最低値。この二人でやって、本当に大丈夫だろうか？何の事故も無く終わるか心配になってきた。

そんな心配をよそに、作業を始める二人。

二人とも真面目にやっている——ように見えて、二人ともかなり不真面目にやっている。

枕崎は先生がいる手前、適当にやるわけにもいかず、かといって本気でやるのも面倒なので、結果、さも真面目にやっているかのよ  
うな演技をしている。その縁起にもやる気が無いので、不真面目な  
のが丸分かりなのだけど。

日々屋はといえば、自信があるだけに、本気でやら無くても大丈  
夫だと思っているらしく、鼻歌交じりに作業をしていた。

二人が二人して、桧野君と七城の失敗を参考にするつもりは無い  
らしい。

そして、案の定二人は失敗した。

「なあってえーだあー！」

「はあ……」

失敗といえば、間違いなく失敗なのだが桧野君と七城の失敗より  
も悪い、失敗だ。

二人の作り上げた式（実質は日々屋一人で作った）は、稼動する  
ことさえなかった。重い音を一度長くうならせただけで、そのまま  
音を消し、直方体を変形させること無く停止、それからずっと消沈  
したままだ。

「なあってえーだあー！」

もう一度絶叫する日々屋。

そんな日々屋を慰めるためか、枕崎は彼の肩をポンと叩いて、ユ  
ラリユラリと席に戻っていった。欠伸をしながらだったのは照れ隠  
しか、全く分からなかった。

そんな枕崎の後を、日々屋は頭を抱えながらついて行く。

案外、この二人いいコンビかもしれない。魔術こそ失敗したが。

二人の失敗を引きずるのはよくないか。次は俺たちの番だ。気持  
ちを切り替えなければ。

ちょうどそこで、チャイムが鳴った。張り詰めていたクラスメイ  
トの精神が、間抜けなチャイムの音で、一気に解ける。

先生が合図をした途端にやってくる喧騒。先ほどの緊張感が嘘の  
ようだ。

「次は私達だね！もうドツキドキだよ」

といいながらも、嬉しそうに笑っている綴木。緊張していない、というわけじゃないんだろうけど、それ以上に好奇心が勝っているようだ。

こいつの為に、成功しないと。そう心に言い聞かせて、不安を消そうとする。

「ねえねえ、もし上手くいったらさ、一緒に何処かでパーッと楽しもうようよ、今日の放課後」

不安が顔に出ていたのか、綴木は努めて声を明るくして、俺に話し掛けてくる。

「いや、放課後は部活……いや、どっかいくのも良いかもな」

ここで断ると、綴木の努力を無下にしてしまう。せつかく俺の事を気にして誘ってくれたのに、それは酷いか。

一日部活を休むくらい、許してくれるだろう。

「ウソ！？マジ！？マジですかっ！？」

「そんなに驚かなくて良いだろ？何だよ、誘つといて」

「やーっ！今の無しっ！ナッシング！取り消すから、一緒に行こ！ね？ね！？ねーっ！？」

「分かった！分かったから、くつつくな！」

「やーん、抱き抱き！」

早まった、かな……？想像以上のハイテンションだ。

「よーし、絶対成功させるよー！」

綴木は二カッと明るく笑う。

これはこれで、いいか。俺は素直にそう思った。

そしてまた、間抜けなチャイムの音が響く。俺たちの番の始まりだ。

綴木と並んで前に出る。周囲のニタニタ視線から察するに、やっぱり何か仕組まれていたらしい。

そんな視線を浴びながらも（むしろ浴びているからこそ）、綴木は笑っていた。もしかしたら、仕組んだ張本人は綴木自身なのかも

しない。

そんなことを今気にしたって、魔術式の邪魔になるだけだ。追及は後に回して、作業に集中しよう。

真っ白い紙の上に、細かく分担した作業を綴木と行う。

順調に魔術式は書きあがっていき、十分程度で完成した。

……不意に、不安がよみがえる。

「じゃ、いくよ？」

「ああ」

そんな思考を押さえつけて、綴木に応答する。

二人で確認しあつて、粘土を魔術式の中心に置く。

軽いノイズと共に、重い稼動音で動き出す魔術式。とりあえず、

日々屋と枕崎のような失敗は無いようだ。

このまま何事も無く終わってくれると良いんだけど……。

そんな俺の、淡い期待は、天に届かなかった。

最初の異変は音。ガッ、ガッ、と魔術式が不気味に音を上げ始めた。

次は光。目の眩むような異常な光量が発生している。

それに先生がまず気づき、的確に指示を飛ばす。言ったのは、たった一言。

「みんな！伏せて！」

そんな声を聞いたとき、俺は既に動いた。

その後のハッキリした記憶は無い。みんなが無事にいるかどうか、何が起こったかも、俺はさっぱりだ。

ただ一つ、憶えていたのは、綴木のこと。

綴木の事を守ろうと思い、必死に動いた結果、俺は――。

綴木を庇うように抱きしめて、

爆風に押されて中を舞い、

窓の外に投げ出されていた。

俺はただ、それだけを憶えている。  
そこで、俺の意識は完全に黒くなった。

- 202・七月七日（side・S） -

「兄さん！」

私は病院の階段を無我夢中で駆け上がる。

学校で授業を受けていると、突然、先生から呼び出しを受けた。

そこで、兄さんが事故に遭ったと聞き、そして、いつの間にか病院に来ていた。

道のりは……どうだったか憶えていない。どうやって来たのかも分からないことだらけだったけど、そんなこと気にならなかった。

ナースステーションで兄さんの病室の場所を聞く。

それだけの理性は、まだ残っていた。

四階の一番奥の部屋。それだけ聞いて、私は走った。看護師さんの制止は聞こえない。

ただ、兄さんの下へ走る。

「兄さん！」

ドアを蹴り破らんばかりの勢いで、病室へ入った。

六床あるベッドは三つだけうまっている。左の一番奥と、右の一番奥と真中。

その右の一番奥のベッドに、兄さんは横たわっていた。

痛々しく首に巻かれた固定具と、腕に巻かれた包帯に滲んだ血。

それを見て……私の中で何かがはじけた。

自分でも驚くようなスピードで兄さんへと駆け寄り、跪いてベッドにしがみつく。

「兄さん！兄さん！兄さん！」

涙が止め処なく溢れているのも気にせず、兄さんの体を揺さぶる。ベッドのスプリングがギシギシきしみ、兄さんの体が揺れた。

それでも、兄さんは目を覚まさない。兄さんの目を覚まさせるために、私は更に兄さんを揺すった。

「兄さん！兄さん！兄さん！」

「何やってるの！？」

私の様子を心配してか、後を追ってきた看護師さんが、私を見て声をあげた。

そんなことは気にせず、私は兄さんを揺さぶりつづける。

看護師さんは私を後ろから羽交い絞めにして、引き離す。私の力が思ったより強かったのか、看護師さんはよろめいた。

「ちよ、落ち着いて！落ち着きなさい！」

「離して！離して！」

更に力をこめて、看護師さんを振り払おうとする。それで、看護師さんは本当に危ないと思ったのか、病室にいる別の患者に声をかけた。

「あなた、ナースコールして！」

「え？あ、はい！」

私の強行を見てか、度肝を抜かれていた兄さんの隣のベッドの女性、返事をした。

数十秒後、若い男性の医者らしき人と、二人の看護師さんに取り押さえらる私。

それでも私は、兄さんのために暴れつづけた。

\* \* \*

鎮静剤を打たれた私は、病院の待合室に座っていた。

本当は今すぐにでも、兄さんの下へ行きたいけど、お医者さんに止められていた。多分、兄さんと私を会わせると、先ほどの二の舞になると考えたのだろう。私自身も、そう思う。

さっき、東雲さんに電話したので、じきにやって来てくれるはず。面会は、それからだそうだ。

一刻でも早く東雲さんが来ないかと、時計を見る。  
もう、五時だった。

いつもならもう帰っているなり、白音ちゃんや麟ちゃんと遊んでいる頃。

「あれ？あなたは……」

突然、背後から声を掛けられた。

振り向くと、そこに立っていたのはさっきの病室で、ナースコールをした人だ。

「さっきは……ごめんなさい。私、動転してて……」

私はとつさに謝った。そこで、自分の声が叫びすぎで枯れている事に気づく。

「はは、別に謝らなくて良いよ。お兄さんがあんな風になっちゃったら……仕方ないよ」

入院服を着たその女の人は、少し影のある笑顔をした。

無理矢理明るく振る舞っている、そんな印象。

「でも、驚かせちゃったし、病気の人に無理させちゃって……」

「いや、私は病気じゃないよ。ちよつとした、怪我。入院は一応してるだけで、明日少し検査したら退院できるらしいし」

彼女は力なく、はは、と笑い声を付け加えた。

言葉は明るいのに、どこにも覇気が見えない。

「……あれ？でも、どうして私が兄さんの妹って……？」

「自分で『兄さん』って言うってたじゃん」

「あ、そうでした……」

「相当動転してるね」

沈んでる私を、慰めようとしているのか、その女性は快活に言う。  
しかしながら、どうやっても語尾に影が残ってしまうようだ。

「ま、私はあなたのこと、結構前から知ってたけど」

「え？」

「遅ればせながら、自己紹介。私は綴木妃奈って言って、幸紀くんのクラスメイト、だよ」

変な自己紹介だった。

この人も、人のことが言えないくらい、動転しているのかもしれない。

「兄が、いつもお世話になってます」

「折り目正しいね。流石、幸紀くんの妹さんだよ。……どっちかっていうと、お世話になってるのは、私の方なんだけど。えっと……飛鳥ちゃん、でいいんだっけ？」

「はい。兄から聞いたんですか？」

「ん、まあ……そう、かな……？」

歯切れ悪く、綴木さんは答える。

兄さんから、私の名前まで聞いているなら、かなり仲のよい間柄なのかもしれない。

複雑な、気分だった。

兄さんのクラスメイトと話すだけで、こんなにも複雑な気分になるのかな……？

兄さんのクラスメイトは少ないから、女友達がいても不思議じゃない。それ以前に、例え綴木さんが——綴木さんが兄さんの彼女だとしても、『兄として』兄さんが好きな私が何か口出しするのも可笑しいし、そもそも、私にそんな資格は……無い。

それよりも。私は無理矢理、頭を切り替える。

兄さんのクラスメイトである綴木さんが、一緒に入院しているとすることは、綴木さんも事故に巻き込まれたんだろう。

詳細を軽々しく聞いても良いか迷い、迷いに迷ったあげく、私は兄さんの家族だと自分に言い訳をして、綴木さんに聞くことにした。「一体……兄さんに、何があったんですか？」

消え入るような小さい声な所為で、聞こえなかったのかかもしれない、と一瞬思っただけ、そんなことはなかった。

綴木さんの反応は、露骨におかしかった。

「う、あ、え、あ」

呼吸が漏れるかのような声と共に、後ずさる綴木さん。

動揺、と言うよりはむしろ、恐怖の表情。

事故を思い出しているの恐怖——じゃない。

私を見て、恐怖している。

綴木さんは、私を恐怖している。

さっきまで、慰めようと明るく声をかけてくれたのに。

「……ごめんなさい」

そう、呟いた。

聞き逃しそうな小さな声で。

確かに、綴木さんは謝罪した。

「幸紀くんがああなったのは、私の……私の所為なの……。……」  
めんなさい」

もう一度、謝罪。

小さな声で、誰にでもなく謝罪する。

まるで、懺悔。

私は、綴木さんの謝罪を、聞き流せなかった。

- 203・x月x日(side・B) -

僕、睦月幸紀は酷く、浮遊感のある心地につつまれていた。  
足を伸ばしても、縮めても、何処にも当たらない。不安定で不安  
な感覚の中にいる。

足を動かしているかどうか分からないほどに。

もしかしたら、本当は足を動かしていないかもしれない。

手も試してみる。足と同じだった。

脛も、目も、鼻も、口も、首も、肩も、肘も、指も、胸も、腰も、  
膝も、踝も、爪先も——全身余すところなく、足と同じだった。

動くのが当たり前のようで、動かないのが当たり前。

「お兄ちゃん」

と、僕の後ろから聞こえた、拙く幼けな呼び声で浮遊感がパツと  
消える。

どうやら僕は椅子に座ったまま、寝てしまっていたらしい。

僕は机の付属品である、安っぽい回転椅子で向きを180度変え  
る。椅子が軋んで、ギィ、と低く鳴った。

最近かってもらったばかりの真っ赤で大きなお気に入りのリボン  
をつけた、八歳くらいの小さな女の子——睦月飛鳥がそこに立って  
いた。

身を小さくして、とても不安そうだった。

「お兄ちゃん……」

もう一度、呼び声。

さっきよりもずっと拙く、ずっと幼けで、ずっと小さな声だった。  
守りたくなるような、それでいて苛めたくなるような、弱々しくて  
可愛い声でもある。

飛鳥の兄である僕は、少し迷って、前者をとることにした。

「ん？どうした？」

飛鳥の肩が、ピクン、と小さく跳ねた。同時に、不安でこわばっていた顔がゆるむ。

飛鳥が不安だったのは、僕がなかなか返事をしなかったせいらしい。どうやら、僕が気付く前にも、何度か声をかけていたらしい。

僕はしまった、という風に、顔を歪めた。飛鳥はそれに機敏に反応し、再度不安な顔になる。

「お兄、ちゃん……？」

「いや、なんでもないよ。それよりどうしたんだ、飛鳥」

これ以上、飛鳥に心配をかけまいと、僕は質問をかさねた。

「うん、あのね、えつとね」

飛鳥の顔から不安が消え、代わりに年相応か、それ以下の幼さが顔からにじみ出る。

「飛鳥ね、お兄ちゃんと外で遊びたい」

「えつと……」

僕は窓から外を眺める。大粒の雨が、窓を軽く叩いていた。

「雨が降ってるだろ？」

「お兄ちゃん、前、雨が降っててもお外で遊んでたもん」

確かに、先日雨が降ったとき、僕は外に出て、キャッチボールをしていた。だがそれは、東雲在逢に無理矢理付き合わされたことだった。

僕が望んでやったわけではない。

でも、そんな理屈が飛鳥に通じるとは、到底思えなかった。

「今外で遊ぶと、リボンが汚れるぞ？」

「取るから良いもん」

「お父さんとお母さんがお家の中で、良い子で留守番してろって言っただろ？」

「お庭なら、お家の中だもん」

「雨で濡れると、風引くぞ？」

「夏休みだからだいじょぶだもん」

「看病が大変だろ？」

「お兄ちゃんがしてくれるからいいもん」

「雨だとすべって転ぶぞ？」

「我慢、するもん……」

屁理屈のような僕の断り文句を、飛鳥はことごとく屁理屈で返した。僕の言葉を返すに連れて、飛鳥はどんどん頭を下げていく。

そして、飛鳥は不満は爆発した。

「あーそーぶーのー！」

小さな体からどうやって出したのかが不思議なほど、飛鳥は大きな声を出した。

手を大きく振り、僕では手がつけられない状態だ。

「なあ、飛鳥。お家の中じゃ駄目なのか？庭とかじゃなくて、リビングとか」

「おーにーいーちゃんーとーおーそーとーでーあーそーぶーのー！ー！」

飛鳥はさらに大きな声を出した。

あんまり使いたくないが、奥の手を出すことにしよう。

「飛鳥、やっぱりお外で遊ぶのはダメだ」

「なんでなんでなんでなんでー！？お兄ちゃんはいいのに、なんで飛鳥は駄目なの！？」

「それは飛鳥は女の子で、僕が男だからだ」

飛鳥は、そう言つと、少し怯んだ。手を振るのをやめ、うつ向き、ワンピースの裾をギュツと握っている。

こう言えば、飛鳥はいつも諦める。可哀想ではあるが、飛鳥に風邪を引かせる訳にはいかない。それは、兄として当然のことだ。

このままだと可哀想だし、明日晴れたら、目一杯一緒に遊んでやる。これも、兄としての役目だ。

「だったら……」

「ん？」

だが、今日はいつもと違った。

諦めきれない、という風に顔をあげ、言い放つ。

「だったら、男の子になるもん……」

「さすがにそれは……」

「男の子になるもん！」

飛鳥は上目使いで、目に涙を一杯に溜め、頬を膨らませて、うー、と唸っている。

飛鳥が男女差、に対して言い返してきたのは、初めてのときと、このときだけだ。

「なるもん！」

ドタドタドタ。

ボタン。

必要以上に大きな音をならして、飛鳥は俺の部屋から出ていった。遠くから、階段をかけ降りる音が聞こえる。どうやら一階に降りたらしい。

きつと、一階で頬を膨らませ、いじけているに違いない。

これは後で取り繕うのが大変そうだ。

とりあえず、少し経ってから、飛鳥の様子を見に行ってみよう。

\* \* \*

が、そんな必要は一切なかった。

5分もしないうちに、飛鳥は二階に上がってきた。その足で、そのまま、僕の部屋に入ってくる。

その時、僕は飛鳥の姿を見て、啞然とした。

どこかで見たような、真っ黒のＴシャツ。

どこかで見たような、クリーム色のズボン。

どこかで見たような、赤と白の野球帽。

どれもこれも、僕の服だった。靴下も例外ではない。

髪に結ばれていたはずのリボンはとられ、代わりに、髪は全て野

球帽の中に。

どこからどう見ても、男の子だった。少しぐらい可愛さが残っていたが、気にならない程度。

「男の子に…… なったよ？ お兄ちゃん…… 遊んでくれるよね？」

僕は思わず、ため息をついた。

これほどまでに飛鳥が外で遊びたがっていたなんて、全く知らなかった。

呆れたような僕を見て、飛鳥は再び不安な顔をする。

「遊んで、くれないの……？」

「…… ったよ」

「え？」

「分かったよ。少しだけだからな、飛鳥」

返答はなかった。が、飛鳥はかすかに震えていた。

何か不味いことをいったのか、僕？

今度は僕が不安になったが、そんな不安、一瞬にして吹き飛ばされた。

「いやつつた——！」

今日一番の大声を、飛鳥はあげた。

小躍りまで始めている。

そうやって一頻り飛鳥は喜んだ後、飛鳥は部屋を飛び出す。

僕は、玄関にタオルを準備しておこう、などと考えながらその後を追う。

そこで、僕は嫌な予感にかられた。不安なんかでは表現できないような、感情が僕に押し寄せてくる。

「飛鳥！」

僕は咄嗟に妹の名前を叫ぶ。

が、その行動は裏目に出た。

ちょうど、飛鳥がいたのは、階段の手前だった。飛鳥はそんなことに気付かず、僕の声に反応して振り向く。

、飛鳥の体は徐々に後ろに傾いていき、

僕は腕を力一杯飛ばすが、その手は何も掴むことなく空をかき、  
そして――  
その先には何もなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4761a/>

---

from YOU.for YOU.

2010年10月28日06時41分発行